

平成29年度「ひろしまの遺跡を語る」

瀬戸内から考える邪馬台国とその時代

—魏の使いは瀬戸内海を通ったか?—

記録集



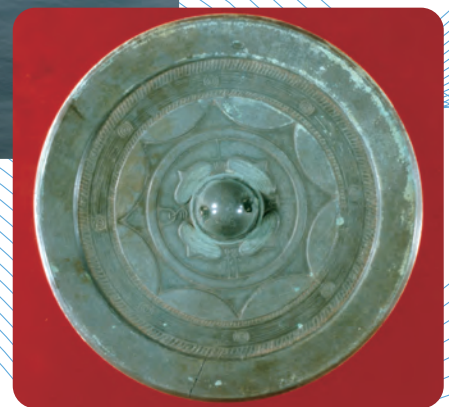
瀬戸内海の潮流（愛媛県能島）



梨ヶ谷B地点2号墓



御領遺跡の船絵画



壬生西谷遺跡の後漢鏡

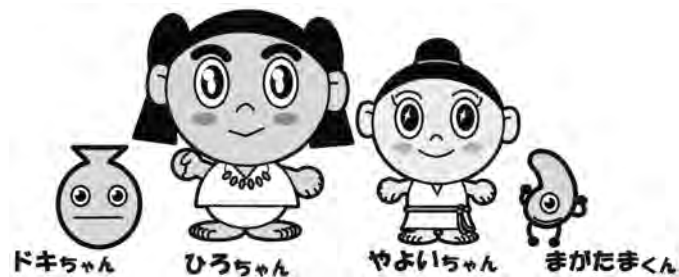
平成30（2018）年
公益財団法人広島県教育事業団

平成29年度「ひろしまの遺跡を語る」

瀬戸内から考える邪馬台国とその時代

—魏の使いは瀬戸内海を通ったか?—

記録集



平成30（2018）年
公益財団法人広島県教育事業団

目 次

開会あいさつ	(1)
報告Ⅰ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と鉄）」 「梨ヶ谷遺跡」（広島市）	(2)
(公財)広島市文化財団 荒川 正己	
報告Ⅱ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（集落と船）」 「御領遺跡」（福山市）	(20)
(公財)広島県教育事業団 伊藤 実	
報告Ⅲ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と後漢鏡）」 「壬生西谷遺跡」（北広島町）	(40)
廿日市市教育委員会 藤田 広幸	
講演「邪馬台国時代の西部瀬戸内」	(52)
愛媛大学 名誉教授 下條 信行	
フリートーク「瀬戸内から考える邪馬台国の時代」	(89)
下條信行・荒川正己・藤田広幸・伊藤 実	
閉会あいさつ	(113)
【参考資料】魏志倭人伝（原文・読み下し・現代語訳）	(114)
関係遺跡年表	(119)
西部瀬戸内の領域図	(120)
『ひろしまの遺跡を語る』略年譜	(121)

平成29年度ひろしまの遺跡を語る「瀬戸内から考える邪馬台国とその時代」 —魏の使いは瀬戸内海を通ったか？—

平成30年1月27日（土）

会 場：広島県民文化センター 多目的ホール

主 催：(公財)広島県教育事業団・広島県教育委員会

10：00～10：15	開会行事		
10：15～10：50	報告Ⅰ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と鉄）」 「梨ヶ谷遺跡」（広島市）	(公財)広島市文化財団	荒川 正己
10：50～11：25	報告Ⅱ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（集落と船）」 「御領遺跡」（福山市）	(公財)広島県教育事業団	伊藤 実
11：25～12：00	報告Ⅲ「ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と後漢鏡）」 「壬生西谷遺跡」（北広島町）	廿日市市教育委員会	藤田 広幸
12：00～13：00	休憩		
13：00～14：30	講演「邪馬台国時代の西部瀬戸内」	愛媛大学 名誉教授	下條 信行
14：30～14：40	休憩		
14：40～15：50	フリートーク「瀬戸内から考える邪馬台国の時代」 パネラー：下條 信行・荒川 正己・藤田 広幸 進 行：伊藤 実		
15：50～16：00	閉会行事		

写真提供：(公財)広島市文化財団文化財課

資料提供：(公財)広島市文化財団文化財課・広島県立歴史民俗資料館

開会あいさつ

公益財団法人広島県教育事業団

理事長 樽谷 敏治

皆さん、おはようございます。本日は、早朝からまた大変冷え込んだ中、多くの方々にお越しをいただき、誠にありがとうございます。

この「ひろしまの遺跡を語る」という催しは、昭和62年に始まり、今年で満30年ということになります。

当初は開催時期は定まっておりましたが、平成17年度以降は新春恒例の文化イベントとして定着をいたして

おります。これまで長く続けてこられましたのは、ひとえに本日お越しの皆様方をはじめとして、多くの方々の御支援の賜物でございます。心から感謝を申し上げます。

さて、今回は「瀬戸内から考える邪馬台国とその時代」というテーマで開催をいたします。中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場いたします邪馬台国、あるいは卑弥呼について関心をお持ちの方は大変多いかと思えます。謎の部分も多くございますが、本日は、邪馬台国があったとされる3世紀前半にスポットを当てまして、広島を含む瀬戸内の遺跡からその時代の暮らしぶりを探っていきたいと考えております。

午前中に県内で邪馬台国時代の遺跡の発掘調査を担当いたしました3名の方に御報告をいただきます。午後からは、愛媛大学名誉教授の下條信行先生に邪馬台国時代の西部瀬戸内というテーマで御講演をお願いしております。その後、3名の報告者と講演者によるフリートークを予定しております。

最後になりますけれども、今後とも広島県教育事業団埋蔵文化財調査室の活動に対しまして、御理解と御協力を賜りますようお願いを申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いたします。



【報告 I】ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と鉄）

梨ヶ谷遺跡（広島市）

(公財)広島市文化財団 文化財課

荒川 正己

広島市文化財団の荒川と申します。こういう大きい会場でお話しするのは初めてなので、大変緊張しております。30分ほどおつき合いいただきたいと思います。

では、最初の報告といたしまして、広島で発見された邪馬台国時代の遺跡「墓と鉄」というタイトルで、梨ヶ谷遺跡という遺跡、そしてこの時代に太田川の下流域でかなりたくさん造られた竪穴式石槨のお墓について、お話をさせていただきます。



1 梨ヶ谷遺跡

梨ヶ谷遺跡は、広島市の弥生時代の遺跡の分布地図で示すとこのあたりです【スライド1】。この広島市の北東部は口田地区と呼ばれてまして、古い町名でいくと旧高陽町域にあたります。梨ヶ谷遺跡は、その広島市との境のちょうど川沿いで発見されました。平成7年から9年、約2カ年にわたって調査をいたしまして、弥生時代後期の村の跡と、その村が使われなくなった後に造られた弥生時代の終わりごろの墳墓群が確認されました。

口田地区は、昭和40年代から広島市のベッドタウンとして大規模な開発が行われてまして、現在は高陽A団地、B団地、C団地という



【スライド1】梨ヶ谷遺跡群と周辺の遺跡

ふうと呼ばれておりますけれども、その大規模開発に伴って、多数の主に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が発見されております。分布地図【スライド1】を見ていただくと、かなり遺跡が密集している地域だということがおわかりいただけると思います。

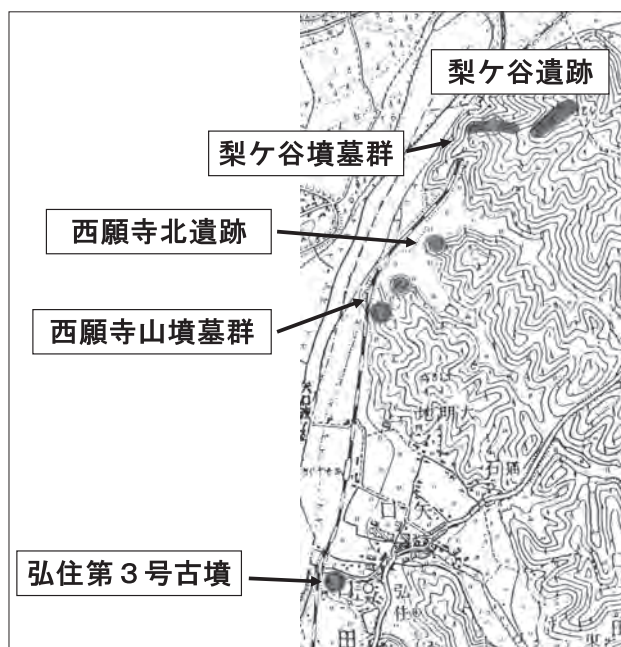
当然、これが全て当時の状況を示しているわけではありませんが、これまでの開発の履歴を考えると、おおむね

弥生時代もこんな感じで人が住んでいたのかなというふうに考えています。

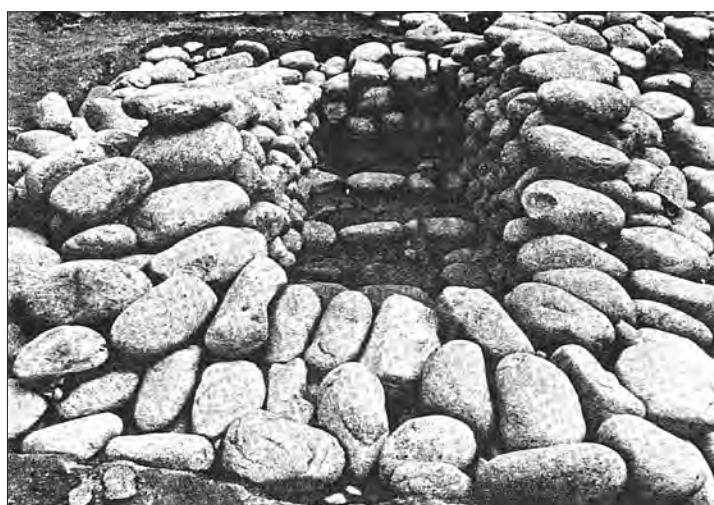
その中でも、梨ヶ谷遺跡のすぐそばで、既に発掘調査されておりました西願寺北遺跡、西願寺山墳墓群、そして弘住第3号古墳の3つの遺跡【スライド2】からは、8基の主に河原石を使った竪穴式石槨が見つかっており、口田地区は全国的にも珍しい形の竪穴式石槨がある地域ということで、ある程度認知されていたところでした。

どのようなものかといいますと、【スライド3】は西願寺山墳墓群のD地点の第2号石室の報告書からコピーしてきた写真なので、若干画質が悪いのですが、こういった河原石をきれいに積んだ竪穴式石槨です。

ただ、これらの石槨の中で弘住第3号古墳は土器が伴っており、古墳時代初めごろのものだというのはわかっていたのですが、それ以外はほとんど時期がわからない。さらに西願寺山D



【スライド2】梨ヶ谷遺跡群と周辺の遺跡



【スライド3】西願寺山墳墓群D地点第2号石室

地点とC地点は県史跡として保存されることになりまして、これ自体は大変いいことですけれども、そのかわり、この石槨がそのままの形で残されました。そのため発掘していない石槨の下部にどういうものがあるのか、どんな構造なのかがわからないままになっておりました。そういうわけで、これらの竪穴式石槨はいつのものなのか、調査当初は古墳時代も結構下がる時期のものじゃないかというような話もありましたし、造られた時期がわかりにくい、詳しい構造もわからない、意義が確定していないというのが課題として残っていたわけです。梨ヶ谷を掘るころには、おおむね弥生時代の終わりごろのものなのかなという考えに皆さんまとまりつつあったとは思いますが、これらの課題を整理整頓するヒントを出してもらえたのが、梨ヶ谷遺跡だったということになります。

では、梨ヶ谷遺跡の話に進みましょう。

これは、航空写真ですね【スライド4】。ご覧のとおり、北から海側を望むような形で、梨ヶ谷遺跡、西願寺北遺跡、西願寺山墳墓群、弘住第3号古墳と、ほぼ等間隔に並んだ尾根筋先端に遺跡があるのがおわかりいただけだと思います。



【スライド4】 梨ヶ谷墳墓群

これが梨ヶ谷遺跡です【スライド5】。資料集では第1図と第2図になります。スライドの画面の右側が、尾根筋の山側になります。長い尾根筋の、上手がA地点、下手がB地点になりまして、両方に弥生後期の初めごろから中ごろぐらいまでの集落が全体に広



【スライド5】 梨ヶ谷墳墓群

がっていました。それが使われなくなってからB地点に墳墓群が造られております。

【スライド6】は、資料集の第2図にあたります。山側（画面左側）から1号墓、2号墓、3号墓、そして土坑墓群という構成になっております。

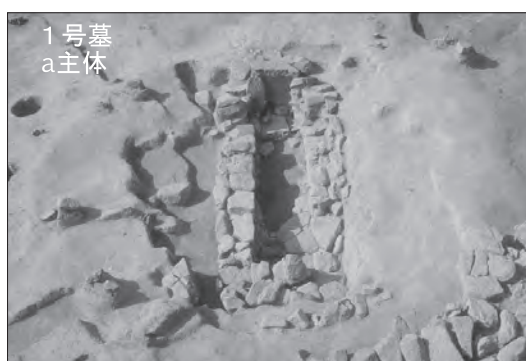


【スライド6】 梨ヶ谷墳墓群全景

【スライド7】は1号墓です。直径8～9mぐらいの歪な円形で、その中に割石を主に使用した竪穴式石槨が出ております。【スライド8】は、石槨をもうちょっと別の角度からアップで撮ったものです。資料集の2ページ目の第1表に、これから紹介するそれぞれの石槨のサイズや特徴を書いております。1号墓の竪穴式石槨の墓坑は長さ約3.9m、幅1.8m、深さ64cmで、その中に板石を積んで、その内側に長さ2.6m、幅64cm、深さ50cmという、非常に細長く、ちょっと薄い棺が入っていたようです。これが1号墓のa主体です。



【スライド7】 梨ヶ谷墳墓群1号墓



【スライド8】 梨ヶ谷墳墓群1号墓a主体

1号墓は、あと2つ主体がありまして、墳丘の裾に木棺を直接納めたb主体、そして土器棺墓です。土器棺墓は大きな土器を使った幼児のお墓で、これをc主体としています。

		1号墓a主体	2号墓a主体	2号墓b主体	2号墓c主体
墓坑規模	長さ	390	394	320	280
	幅	176	256	208	172
	深さ	64	152	136	80
石槨内側規模	長さ	280	224	212	172
	幅	64	70	56	60
	深さ	50	90	80	54
石槨構造	石材	割石	河原石	河原石	混用
	墓坑底面	全面に貼石	全面に貼石	全面に貼石	小口壁構築後貼石
	床上施設	不明	棺台石	棺台石	小円礎層
	壁体	小口壁一側壁	らせん状一体	らせん状一体	小口壁一側壁
	蓋	不明(木蓋か?)	木蓋	木蓋	蓋石
標識施設	割石列石	円礎堆+立石	河原石列石	無し	
遺物		板状鉄斧	刻1.袋状鉄斧3.蓋1.鏃2.鏢2.鏃1	袋状鉄斧	

【資料集 第1表】 梨ヶ谷1・2号墓の規模と構造

【スライド9】は第2号墓です。

第2号墓は、画面でいうと上と下を溝で区画し、大体台形状をした区画墓です。実際は片側（画面の右側）が削られていたので、本来はおおむね歪な円形か方形のお墓とは思いますが、ちょっと現在ではわかりません。その中に合計で6つの主体が確認されております。主に河原石を使った石槨がa主体、その左側のb主体、その上のc主体です。c主体の右には土器棺墓のd主体、木棺墓のe主体と並んでいて、画面では見えませんが手前にf主体があります。



【スライド9】梨ヶ谷墳墓群2号墓



【スライド10】梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体

この中で注目すべきなのは、a主体とb主体です。a主体【スライド10】は、墓坑の大きさが長さ約4m、幅2.6m、深さ1.5mぐらいで、結構深い墓坑でした。その中に河原石を積んで、お棺を埋葬しています。お棺は長さ約2.2m、幅70cm、深さ90cm。墓坑と棺の深さに差があるのは、途中で階段状に石が組まれているためです。大体1個が10kg前後のきれいな真っ白な河原石を約1,500個使って造られていました。



【スライド11】梨ヶ谷墳墓群2号墓b主体

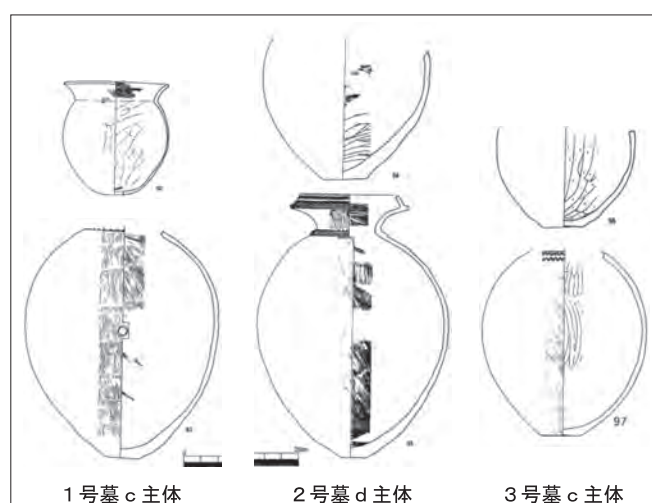
【スライド11】はb主体です。a主体、b主体の図面は資料集の6・

7ページにありますので、これも一緒にご覧ください。b主体はa主体とほとんど一緒の構造をしておりますが、ちょうど河原石1個分ずつぐらい一回り小型にできています。その一方でお棺のサイズは、長さ2.1m、幅56cm、深さ80cmですから、お棺の大きさはあまり変わらない。お棺の規模は変わらずに、お墓全体の大きさとしては減っている。使われた河原石は約1,000個で、a主体に比べ約500個分省力化されている。これが2号墓のb主体です。ちょっと時間がないのでその他の墓は割愛します。

今ご覧いただいたように、梨ヶ谷遺跡からは主に3つの竪穴式石槨が確認されたわけですがけれども、この発掘調査によって、5つのことを明らかにすることができました。

まず第1点目ですが、時期がほぼ特定できたことです。最初にちょっとお話ししましたが、太田川の竪穴式石槨はほとんど土器が伴っておりませんので、大まかな感じでしか時期がわかりませんでした。梨ヶ谷の石槨もそれぞれの石槨に土器は伴っていないので、個別の時期は決定できません。しかし、1号墓、2号墓には土器棺墓が造られています。土器棺墓はいずれも墳丘の裾部に位置するので、葬られたのはそれぞれの墳丘が造られたときよりも後と考えられます。土器棺墓に使われていた土器【スライド12】を見ますと、恐らく弥生時代の終わりごろから古墳時代初めにかけての土器です。よって、1号墓・2号墓ともに、遅くともこの時期までには造られたと考えられます。

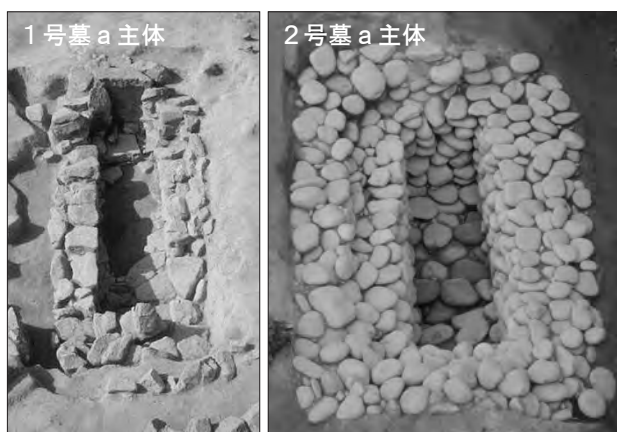
一方、最初にもお話ししましたが、梨ヶ谷遺跡は、墳墓群が造られる前に集落が営まれておりました。この集落は、大体後期の中ごろまでは使われていたので、お墓が造られたのは当然それよりも後になると考えられます。これらのことから、墳墓群



【スライド12】梨ヶ谷墳墓群の土器（時期）

の築造年代は弥生時代の後期後半から弥生時代の終末期までの間と考えると、まず間違いはないでしょうということが言えるようになったわけです。これが成果の第1点目。

第2点目は、2種類の石槨の存在が判明したことです【スライド13】。太



【スライド13】 梨ヶ谷墳墓群2種類の石槨

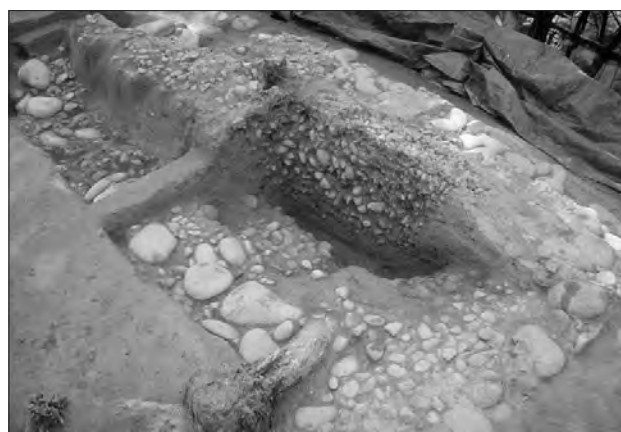
田川の下流域で確認されていた竪穴式石槨は、大体大きさが2m前後のお棺が入っています。河原石を主に使って、おおむね一つのくりにされて語られることが多かったのですが、梨ヶ谷という一つの遺跡の中から、明らかに使われる石材が違う2種類の石槨が出てきました。これは写真や図面を見ていただければ一目瞭然だと思います。河原石の2号墓 a 主体と割石主体の1号墓 a 主体、もう全然違います。長さは大体一緒ですが、墓坑の幅も全然違いますし、深さは割石主体の1号墓 a 主体（画面左側）が50cmぐらいしかないのに、河原石の2号墓 a 主体では90cmぐらいあります。

石材が違うだけじゃないか、という見方もあるとは思いますが、そもそもお葬式というのを考えたときに、お墓の材料も当然昔の人たちは自力で集めなきゃいけなかったわけです。例えば、時代も性格も違いますが、諏訪の御柱祭とか伊勢神宮の式年遷宮、どちらも材料の木を倒すところから一大イベントになっていますよね。そういうことを考えると、お墓づくりというのも、その石材を採取するところからイベントが始まっていたのではないかなと思います。割石は山中の露頭から割り取ってきたのでしょう。一方河原石の場合は、梨ヶ谷の標高が約70mぐらいですので、すぐ下の太田川の河原から石を拾ってきたとしても、70m弱の高さを、1個10kgぐらいある石を1,500個も運び上げる必要があるわけです。もう大変なイベントになるわけで、そう想像すると、やっぱりこれは選択的に材質の異なる2種類の石槨が存在したと考えていいんじゃないかと思います。

3点目は、完全に石槨を解体できたので、構造と構築手順がわかりました。2号墓 a 主体を例にとりましますけれども、【スライド14】は、2号墓 a 主体を少し掘り始めたころです。周りに石槨の縁の石が顔を出し始めます。真ん中に砂利が見えています。それを断ち割ると、この砂利がかなり深くU字型に落ち込んでいる様子がわかってまいりました【スライド15】。これらはどうもお墓の上に積んであった砂利だったみたいですね。その砂利を取り除くと、今度は真ん中から四角い大きな割石が真っすぐ立っている【スライド16】。また、この周りの縁のちょっと内側のところからは、灰色の粘土と小石がべちゃっとなつた状態で発見されるようになってきます。お棺を入れたスペースの底の部分からも同じように、灰色の粘土と砂利が見えてきました。



【スライド14】 梨ヶ谷墳墓群2号墓 a 主体



【スライド15】 梨ヶ谷墳墓群2号墓 a 主体



【スライド16】 梨ヶ谷墳墓群2号墓 a 主体

これをさらに取り除きますと、床面に先行して石の列が5列出てきた様子が見てとれます【スライド17】。ここはちょっと見えにくいんですけども、床面の土が赤っぽいところが鉄剣が出土したところになります。それ以外にも壁際のところから鉄斧等の鉄器が姿を現し始めたりしています。それも全部とって、まず第1段階としては完掘です。この石槨の特徴である、石槨の

縁が階段状に外側が高く内側が一段低く、さらにその内側にお棺を納めるスペースが造られている構造というのが見てとれますね。その石槨の石材を全部外してしまうと、墓坑の一番下のところから床面いっぱい石を敷いている状態というのが明らかになりました【スライド18】。これを取外すと、最初の素掘りの墓穴になるわけです。



【スライド17】 梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体

以上のことを総合して、簡単に復元図を書くと、こんな感じになるとおもいます【スライド19】。まず墓坑を掘って、その床面に石を敷きます。さっき完

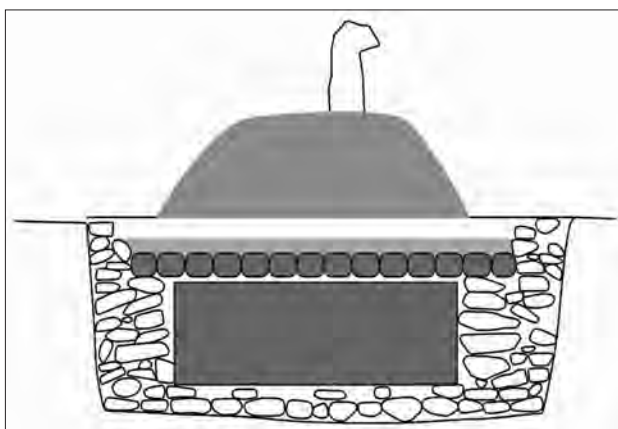
全に床面が出る前に5列の石列が出てまいりましたが、これは恐らくお棺を載せる棺台の石であろうと思います。

この棺台石をよくよく観察すると、壁石の中に潜り込んでいくんですね。ということは、先に壁を組んでその中に棺台石を置いたのではない。恐らく床



【スライド18】 梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体

石の上にまず棺台石を設置し、お棺を置いて、その後で四周の壁体を積んだのでしょう。壁体の完成後、木製の蓋をします。木蓋と墓坑の隙間を埋めた跡が、石槨の縁の階段状の構造です。その上に灰色の粘土と砂利を敷いて全部埋め、最後に砂利で小山を造って、

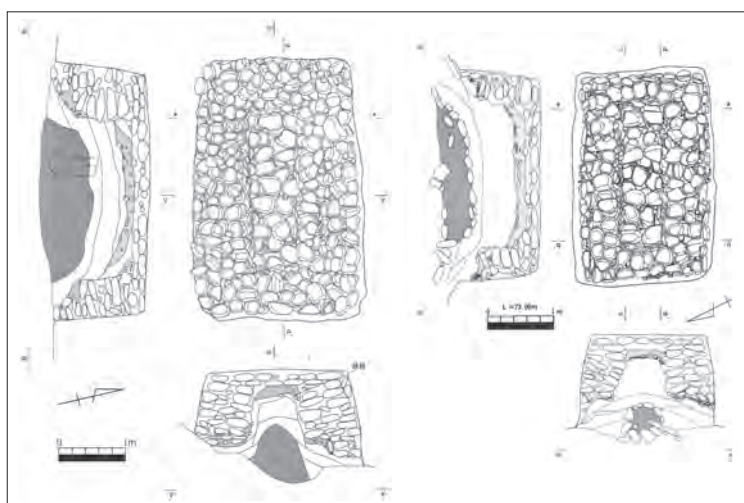


【スライド19】 梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体の構造

墓標石をその上にぶすっと刺す。このような手順と構造でこのお墓は造られた。これ

が明らかになったのが、3点目です。

第4点目は編年のヒントが得られたことです。【スライド20】は、2号墓のa主体（画面左側）とb主体（画面右側）です。見てのとおり一回りb主体のほうが小さいで



【スライド20】梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体（左）とb主体（右）

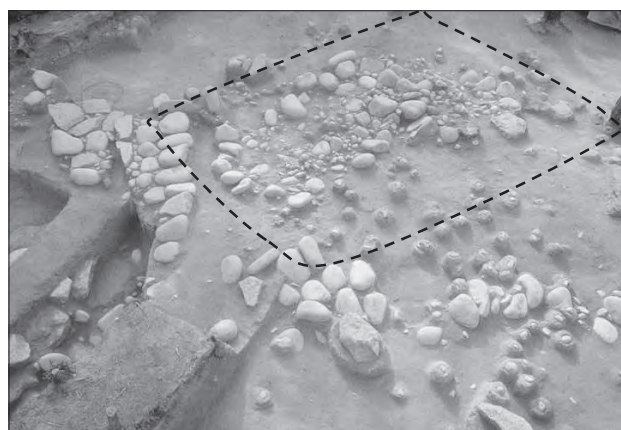
すが大変よく似ている。しかし、1か所だけ大きく違うところがあります。標識施設です。さっき詳しくお話ししたとおり、a主体のほうは砂利を積んで小山のように盛る円礫堆と呼ばれる石饅頭のようなものが標識施設として造られていました。しかし、

b主体の方はそういう小石を盛ったようなものではなく、断面に石が見てとれるのがおわかりいただけると思います。【スライド21】がa主体です。真ん中に小山のように石を積んでおりましたが、b主体のほうは河原石を敷き詰めたような化粧が施されてました



【スライド21】梨ヶ谷墳墓群2号墓a主体

【スライド22】。さらに、画面の点線のところがb主体の掘り方（墓坑の掘り方）で、この範囲をもうちょっと掘り下げると、断面がU字型に石が並んで出土しました。もともとU字型に石を敷き詰めたわけじゃなくて、お棺が腐った後、その上に敷き詰めていた石



【スライド22】梨ヶ谷墳墓群2号墓b主体

が落ち込んだものだと考えています。

いずれにしろ、a主体とb主体ではその標識施設の部分が違います。この違いがなぜ生じたか。a主体とb主体の墳丘上の位置を考えると、a主体のほうがより真ん中に近いので、2号墓ではa主体がまず最初に造られ、その後しばらくしてb主体が造られたと考えるのが妥当でしょう。そうすると、この標識施設の違いの主な原因は、時期差によるものではないかと推測されるのです。もしそうであれば、石槨を編年できるかもしれない。これが4点目です。

最後の5点目ですが、大量の鉄器が出土したことが挙げられます。梨ヶ谷遺跡からは、鉄剣をはじめ、鉄の斧や鑿、鎌、ヤリガンナ、鑿の農工具類など【スライド23】全部で11点の鉄器類が出土しておりますが、そのうちの9点が2号墓a主体に集中していました。これらの鉄器は、例えば画面右下の袋状鉄斧は、どうも形から舶載品だろうと考えられています。また、鑿は、全国的に見てもこの太田川下流域からしか発見されていないようです。量的にも同時代のほかの遺跡では見られないほどのものですし、このお墓に葬られた人たちの性格を考える上で非常に興味深い点です。



【スライド23】 梨ヶ谷墳墓群の鉄器

また、これらの鉄器の出土状況ですが、鉄剣は床面のちょうど真ん中ぐらいから出ておりま

すので、これはお棺に副葬されたものだと思うんですが、それ以外の鉄器は全部石槨の壁の石材の間から出てるんですね。

【スライド24】は石に挟まれて鉄器が出土した様子です。画面



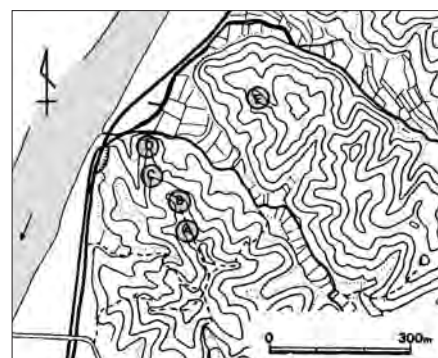
【スライド24】 梨ヶ谷墳墓群の鉄器出土状態

左側が石槨の壁に挟まれて鉄器が出土した状態で、画面右側は上の石材を取り外して埋められた状態を横から見た写真です。どう考えても、これは壁体を造るときに一緒にそこに置かれたもので、壁を造ってる間に鉄器を埋納するような儀式が行われていたと思われるのです。鉄器がどこからもたらされたかというのも重要ですが、お墓を造る儀礼の際に鉄器をこのようにお供えする儀礼の存在がわかったということでも、また非常に興味深いんじゃないかなと思います。

2 太田川下流域の竪穴石槨群と梨ヶ谷遺跡

ちょっと駆け足になりますけれども、太田川下流域の竪穴石槨について見ていきましょう。

梨ヶ谷遺跡の一番近いところから西願寺北、西願寺山墳墓群、そして弘住第3号古墳です【スライド2参照】。一番最初に調査されたのが西願寺山墳墓群で、2つの尾根にA、B、C、D、Eと5地点が



【スライド25】西願寺山墳墓群

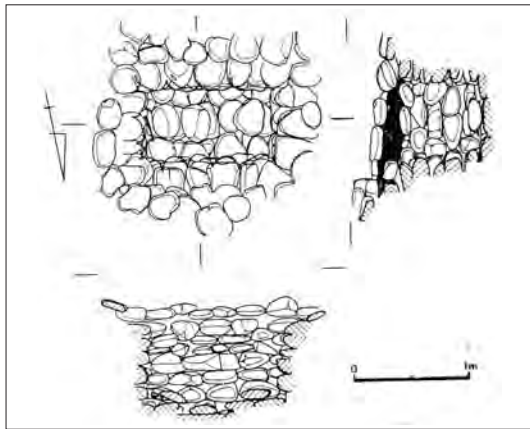
分かれており、そのうちC地点とD地点とE地点から石槨が見つかっております【スライド25】。一番尾根筋の先にあるのがD地点で、発見当初はこんなふうに石が一面に敷かれていたみたいですね【スライド26】。梨ヶ谷2号墓b主体の標識施設が全体に広がったようになっていたようですが、その下から発見された小型な1号石室の写真【スライド27】と図面【スライド28】と、大きい2号石室の写真【スライド29】です。これらの石槨の図面は資料集の8ページに載せておりますのでご覧ください。D地点の特徴は、実は梨ヶ谷と



【スライド26】西願寺山墳墓D地点



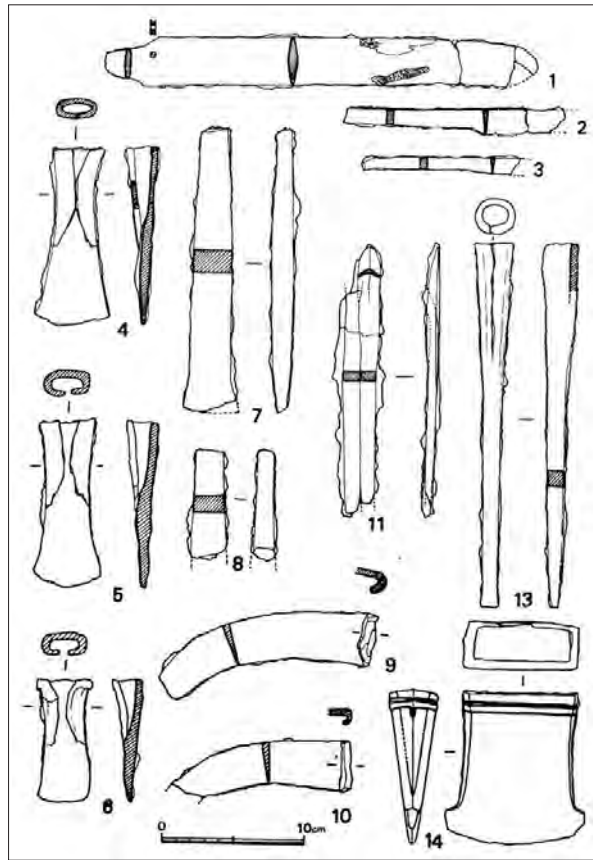
【スライド27】西願寺山墳墓D地点第1号石室



【スライド28】西願寺山墳墓D地点第1号石室



【スライド29】西願寺山墳墓D地点第2号石室



【スライド30】西願寺山墳墓の鉄器

同じように大量の鉄器が副葬供献されていたということがわかっているところです【スライド30】。【スライド31】は西願寺山C地点です。D地点より一段高い位置にあります。発見当初はD地点と同じように全体に円礫が敷かれていたようです【スライド31】。それを全部外しますと、【スライド32】のような墓坑が現れます。この中で竪穴式石槨は、まず1号石室【スライド33】です。これはC地点の中で一番大きく墓坑の長さが4mぐらいあります。【スライド34】は2号石



【スライド31】西願寺山墳墓C地点



【スライド32】西願寺山墳墓C地点



【スライド33】西願寺山墳墓C地点第1号石室



【スライド34】西願寺山墳墓C地点第2・4号石室



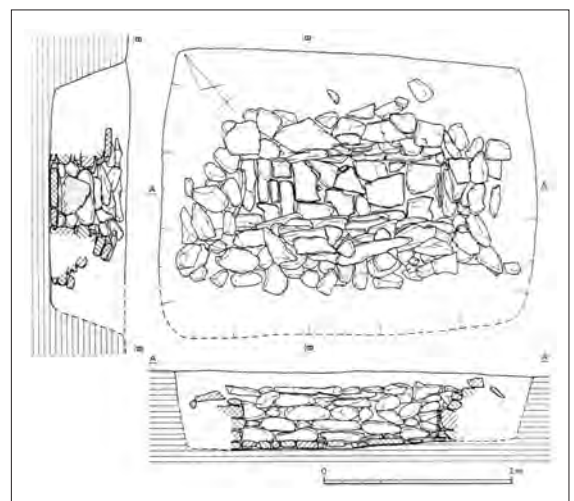
【スライド35】西願寺山墳墓E地点



【スライド36】西願寺北遺跡

室（画面上）と4号石室（画面下）です。両者の床面の構造が違うところを覚えておいてください。また，【スライド35】はE地点の石室です。E地点はこの写真だけでなくシンプルな石槨に見えます。しかし，資料集の8ページの図を見ると，実際は階段状に一段掘り込まれた二重土坑の中に石槨が造られ，土坑上段の縁には河原石が並べられていたことがわかります。これは，実態はちょっと小さめな石槨本体だけでもかかわらず，西願寺山のD地点や梨ヶ谷の2号墓の石槨のような見た目を目指した工夫の産物のようです。

【スライド36】は，西願寺北遺跡です。墳丘が16×12mぐらいの長方形の墳丘のど真ん中に，【スライド37】の図に見るよう



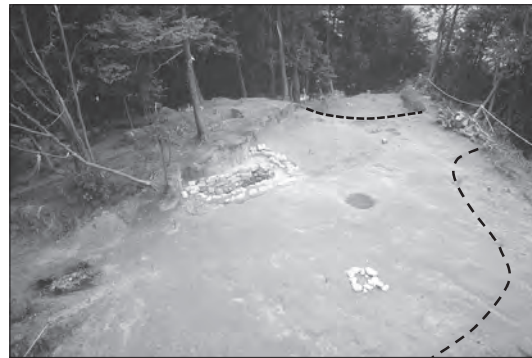
【スライド37】西願寺山北遺跡の石室

に板石と河原石を混用した石槨が造られていました。

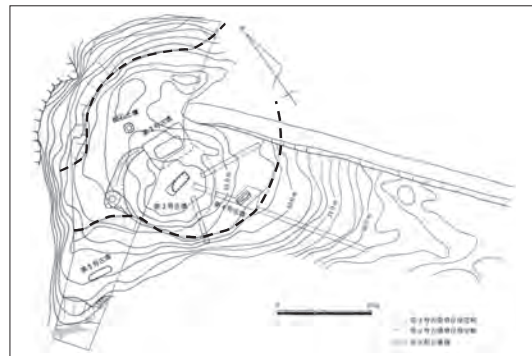
最後にご紹介するのが弘住第3号古墳です【スライド38】。赤い点線のとおり墳丘が確認されておりまして、直径が約25mの円丘に突出部が付く双方中円形の墳丘が復元されています【スライド39】。墳丘の真ん中に造られた石槨は、河原石と割石が混用されていますが、基本的な構造はよく似ています【スライド40】。

太田川下流域の石槨に共通する部分は、石材や全体の形の他、木で蓋をして、その上に何らかの標識施設を持つというところが挙げられます。ただ、よくよく見ていきますと、ちょっと違う部分があるんですね。その違う部分を梨ヶ谷でわかったことを使って整理したのがこの変遷図です【スライド41】。

まず、標識施設に着目しました。梨ヶ谷では2号墓のa主体が小石を積み上げた円礫堆、そしてb主体が河原石の列石という違いがあるというお話をしました。それを基準に分けると、円礫堆を持つグループが梨ヶ谷遺跡2号墓a主体と西願寺山D地点の2号石室、次に河原石の列石が標識になっているもの、これは結構たくさんありまして、西願寺山D地点の2号石室以外やC地点の石室は大体これに入ります。そして標識施設が恐らくなかったものが弘住第3号古墳。この3つに分かれる。そして梨ヶ谷の2号墓でお話ししたように、どうも円礫堆を持つグループが比較的古いタイプじゃないかと思われまして。



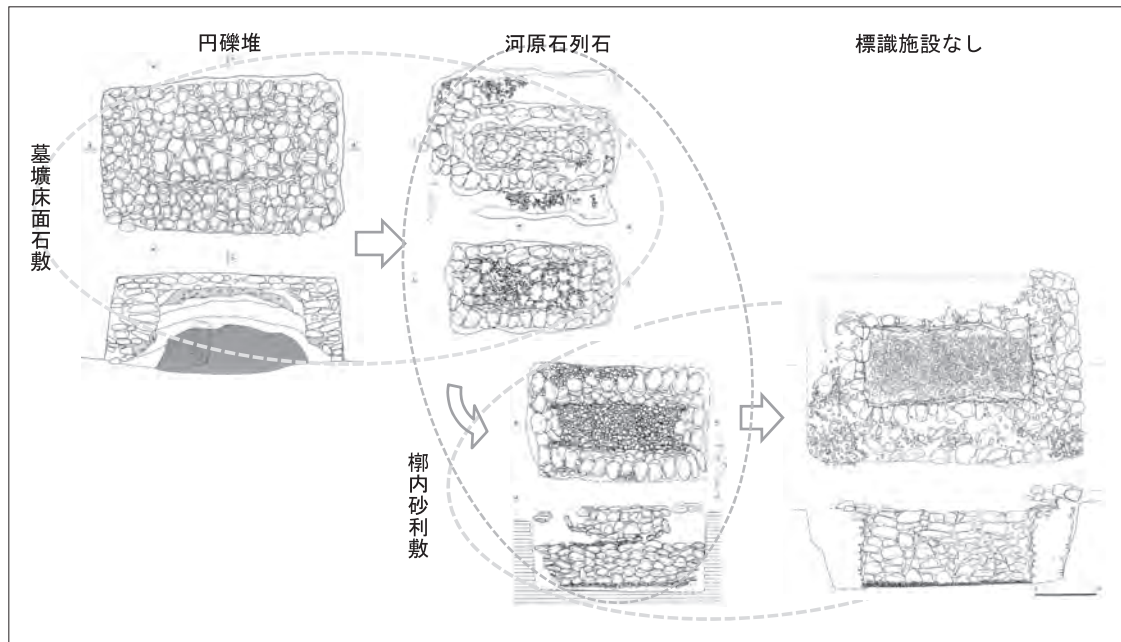
【スライド38】弘住第3号古墳



【スライド39】弘住第3号古墳の墳丘



【スライド40】弘住第3号古墳の石室



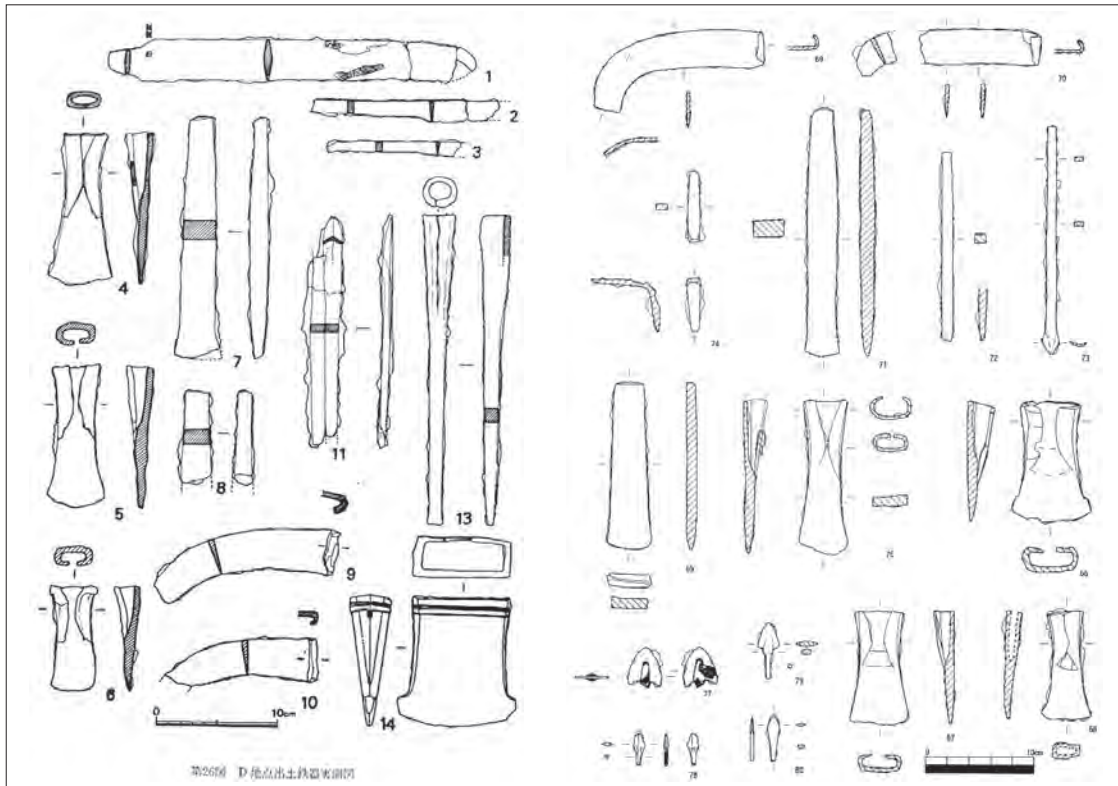
【スライド41】太田川下流域の石室の構築方法の変遷

もう1点の大きな違いは床面の構造です。梨ヶ谷遺跡のすべての石槨や西願寺山D地点の石槨の床面は、河原石で敷き詰められています。西願寺山E地点や、C地点の第1号・第4号石室も同様です。それとは別に、床が円礫敷きになっている西願寺山C地点の第2号石室のようなものがある。【スライド34】を見ると西願寺山C地点の第4号石室は河原石敷き、第2号石室は円礫敷きの床面になっていて、違いがよくわかります。同時に、この写真は両者の新旧関係も表しており、円礫敷きの第2号石室の方が河原石敷きの第4号石室より新しい。

この2点を鍵にまとめると、標識施設は円礫堆で床面河原石敷のものが一番古く、次いで標識施設が河原石列石のもの、さらに河原石列石はそのままで床面が礫床になったもの、そして標識施設を持たず床面が礫床の弘住第3号古墳が一番新しい。

【スライド41】のような変遷をたどって弘住第3号古墳に至るのではないかと推測されます。

この作業で、太田川の石槨群の中で、円礫堆を持って床面河原石敷の石槨が一番古い可能性が出てきたわけですが、実はこういう構造を持っているのは梨ヶ谷2号墓a主体と西願寺山D地点第2号石室の2つだけなのです。さらに驚くことは、その両者



【スライド42】西願寺山墳墓群と梨ヶ谷墳墓群の鉄器

から、全く同じような鉄器が出土していることです【スライド42】。画面右側が梨ヶ谷で、左側が西願寺山D地点になります。数はちょっと梨ヶ谷の方が少ないですが、鉄剣や鉄斧、ヤリガンナ、そして鏝など共通しています。この大きな鏝は今のところ日本では僕の知っている限りではここできか出てないみたいです。鉄斧は恐らく全部舶載品、同じ人が作ったんじゃないかと思えるような“そっくりさん”もあります。西願寺山の鑄造鉄斧（【スライド42】画面左側の右下の14）は刃部の両側が張り出した有肩鉄斧と呼ばれるものですが、梨ヶ谷では鑄造品はなく鍛造で同様の形に近づけようと努力した有肩鉄斧風の鍛造鉄斧（【スライド42】画面右側の三段目の右端の66）があります。いずれにしろ、非常によく似た鉄器のセットを持っているといえます。

ほぼ同じ時期にほぼ同じお墓が、ほぼ同じような鉄器のセットを持っていたということは、この時代の太田川下流域に、よく似た出自のよく似た社会的な立場や経済力を持っていた人物が2人も居たということを示しています。両者の関係はどうだったのかも含めて大変興味深いものがあります。

もう一点、梨ヶ谷でも見ましたが、割石と河原石という使用する石材が違う石槨が並行して存在する謎です。それは梨ヶ谷1号墓と西願寺北遺跡です。特に、西願寺北遺跡に関しては、尾根筋全体がたった一つの墓のために使われており、梨ヶ谷や西願寺とは全然違う風景です。ここら辺はちょっと被葬者の性格を考える上で、重要なポイントじゃないかなというふうに考えております。

ご清聴ありがとうございました。

《参考文献》

- 石田彰紀1991年「中山の歴史のあけぼの」『中山村史』
- 石野博信2008年『邪馬台国の候補地・纏向遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ051
- 岡林孝作2008年「日本列島における木槨の分類と系譜」『ホケノ山古墳の研究』檀考研第10冊
- 川越哲志1993年『弥生時代の鉄器文化』
- 妹尾周三1990年「広島県太田川下流域の竪穴式石室」『古文化談叢』第23集
- 徳島県教育委員会1983年『萩原墳墓群』
- 徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター2000年『萩原2号墓発掘調査報告書』
- 村上恭通2006年「瀬戸内の出現期古墳」『日本考古学協会2006年度愛媛大会資料集』
- 広島県教育委員会1974年『西願寺山遺跡群』
- 広島市教育委員会1983年『弘住遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第25集
- (財)広島市歴史科学教育事業団1998年『梨ヶ谷遺跡』
- 御津町教育委員会2005年『綾部山39号墓発掘調査報告書』御津町埋蔵文化財報告書5

《図【スライド】等の出典》

- 【スライド1・2】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・荒川作成
- 【スライド3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島県教育委員会1974年
- 【スライド4～18】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島市歴史科学教育事業団1998年
- 【スライド19】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・荒川作成
- 【スライド20～24】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島市歴史科学教育事業団1998年
- 【スライド25】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島県教育委員会1974年から荒川作成
- 【スライド26～35】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島県教育委員会1974年
- 【スライド36・37】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・石田彰紀1991年
- 【スライド38～40】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島市教育委員会1983年
- 【スライド41】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・各報告書から荒川作成
- 【スライド42】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島県教育委員会1974年、広島市歴史科学教育事業団1998年

【報告Ⅱ】ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（集落と船）

御領遺跡（福山市）

（公財）広島県教育事業団 埋蔵文化財調査室

伊藤 実

こんにちは。広島県教育事業団埋蔵文化財調査室の伊藤です。御領遺跡のお話をさせていただきます。これは3年前に県立美術館で開催した『ひろしまの遺跡を語る』で弥生土器に描かれた船について、邪馬台国時代の船ということでお話をいたしました。今日はその続き、その後わかったこと、それから邪馬台国時代の広島の遺跡ということで、集落と船と題してお話をいたします。



画面【スライド1】は、御領遺跡の船の絵です。高さが約3cm、幅が11cmほどの大きさで船が描かれております。全国で弥生土器は恐らく10万点以上、もしかしたら数10万点出土していると思いますが、これらはほとんど破片を接合したものですので、破片の数にすると、恐らく誰も数えた人はいないんですけれども、億はくだらないと思います。とすれば、全国で億を超える弥生土器の破片の中でパターン化された

紋様じゃなくて、具象的な絵を描いた土器というのは千点もありません。億の中の千点というと、10万分の1ぐらいでしょうか。そうすると、宝くじに当たるぐらいの確立でこの土器片が見つかったということになります。少し前に“広島県の宝”というキャッ



【スライド1】御領遺跡の邪馬台国時代の船絵

チフレーズで県庁が県の特徴や特産品を宣伝しておりましたが、それならば・・・これが本当の広島県の宝です（笑）。もう一つ言い忘れました。弥生土器の絵画は千点以下だと申しましたが、その中で、船を描いた土器というのは百点もありません。そうすると、ちょっとくどいですが、億を超える土器片の中で、百点もない船の絵の一つであります。そして、その中でも大変わかりやすい具体的な船が描いてありました。今日は、そのお話をいたします。

1 御領遺跡の邪馬台国時代の船絵

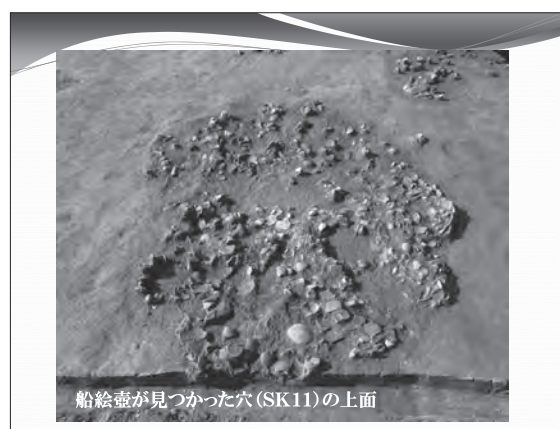
時代は、弥生時代の終わりごろ、2世紀から3世紀ですので、ちょうど邪馬台国の卑弥呼が魏の国に使いを出したと言われております時代のど真ん中です。御領遺跡は、広島県の東の端、岡山県境の福山市神辺町にあります。

どんどこから出てきたかですが、【スライド2】は、発掘調査の様子です。御領遺跡は、東西2km、南北1kmぐらいで弥生時代の遺跡としては広島県だけでなく全国的にも大変広大な遺跡です。その遺跡を東西に貫いて国道バイパスを建設することになり、発掘調査を行いました。

画面の右上のあたりですね。船の壺が出土したSK11。SKというのは、発掘をするときに、昔の人が掘った穴ぼこを、住居跡のSBや井戸跡のSEなどと区別してSKという記号を付けておまして、その11番ということです。この11番の穴をもう少し拡大しますと【スライド3】のような状況でした。穴の上層から土器の破片が数千点といいましょうか、たくさん見つ



【スライド2】御領遺跡の調査と出土した場所



【スライド3】出土した穴の上層のようす

りました。その穴を半分掘りますと、【スライド4】のような状況でありまして、恐らく御領遺跡の人が使っていた弥生土器が割れたり、欠けたりして、使えなくなったものを集めて、穴の中へ埋め込んだ・・・、早い話がごみ処理をした穴だと考えられます。ですから、完全な形にくっつく土器は



【スライド4】出土した穴の半截写真

ほとんどなくて、破片ばかりがたくさん埋めてありました。その中から最初に見ていただいた船を描いた土器の破片が見つかりました。それは高さ50cmぐらいの大きな壺の口の部分の破片ですが、上手に船絵のとこだけ割れずに残っていました。もしかすると弥生時代の人が、これはもったいないので、船絵の部分だけ割るまいや・・・と言って、捨てたものかもしれないなど想像したくなるほどでした。

(1) 船絵の特徴

今日は、実物をロビーに展示をしておりますが、破片を接合した全体の形は【スライド5】のような形です。これは壺の口からくびれた頸の部分の破片でして、一番上に、弥生時代の船としては、非常に立派な絵が描かれています。画面の左側が船の船先で、船の真ん中よりちょっと後方に屋形といっておりますが、屋根がついた船小屋（キャビン）が描かれています。船尾の部分に後方にしなるような形で棹が立っていて、吹き流しのような旗が後方からの風に吹き上がるように数本描かれています。このように船上に屋形が描かれた弥生時代の船は国内では唯一でありまして、旗が立っている船は、岐阜県の荒尾南遺跡で見つっていますが、今のところこの2例だけです。

破片全体の形で注目していただきたいの

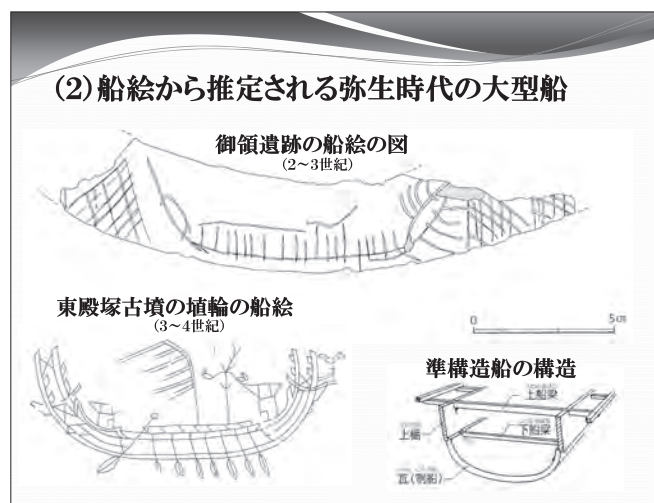


【スライド5】御領遺跡の船絵の壺

は、壺の頸部のところです。くびれた頸部から器形は一旦外側へ開いて、そこから粘土を継ぎ足して、内側にくの字に折れ曲がるような口縁部になります。最初に船の絵が見つかったときは、くびれた頸部の破片はまだ見つかっていませんでしたので、立派な船の絵が出てきたという、これだけで3年前に弥生時代の非常に珍しい船ですということ、船をテーマにお話をしました。しかし、その後、何と頸部の破片が見つかって、接合できました。そうしますと、この壺のちょっと変わった形態の特徴も判明しました。それが頸部に粘土帯を貼り付けて、その粘土帯の上を丸い箸の先のようなもので押さえて粘土帯を壺の頸部に貼り付けていたことがわかりました。この粘土帯の押さえ方といいますか、押さえる工具（丸い箸の先のようなもの）がちょっと特殊なんですけれども、そういう特徴的な装飾がある壺であることが判明しました。こうした壺の頸部に粘土帯をもつものは、神辺など備後地方にはないものです。そうすると、この壺は神辺の御領遺跡の人が作ったものではなく、壺の頸部に粘土帯を貼り付ける特徴をもつ土器を作る地域で作られて、そこで船の絵も描かれて、御領遺跡にもたらされたものだという推測ができました。土器が壺という器形ですから、恐らくこの壺の中に何か貴重なものを入れて御領遺跡に持って来られたものだという推測がなされました。

(2) 船絵から推定される弥生時代の大型船

そうすると、この壺の中へ何が入っていたかというのが問題になります。これが今日のお話の中心になりますけれども、その前に、もう少し船の詳しいお話をしておきます。写真ではわかりにくいので、【スライド6】では絵にしております。画面上方の御領の船の絵の左側が船の舳



【スライド6】弥生時代の大型船を推定すると

先です。その舳先に何か描かれておりますが、これは波を避ける縦板と呼ばれる波除け板が表現されています。それから、舷側板は縦線で表現してありまして、その後方にV字形の屋根がついた屋形が描かれている。船尾には鯉幟りの吹き流しのような旗ですけれども旗が吹き上がるように描かれています。さらに船尾から船外の後方に何本か斜めの線が出ております。これは一部上方のものは旗の可能性もありますが、下の方の線は恐らく操舵用の櫂、いわゆる舵ですね。船の進行方向を定める舵を表現したのではないかと思います。そういう具体的な船の絵です。

それから、この船の両側には、斜めに交差する複数の線で表現した三角形の文様があります。これは弥生土器の壺などの口縁部にはよく使われる文様で、起源は龍の鱗などを文様化した魔よけの意味のある図形と考えられています。たとえば、この壺の中へ悪い虫が入らないようにとか、悪い人が手を突っ込んで中身を盗っていかないようにとか具体的な行為を含めて、広く魔よけ的な意味をもっていると思われませんが、この土器の場合は、船の絵と合わせて考えると、もしかすると今述べた意味合いとともに、海の波を意識した文様とすることもできます。これが邪馬台国時代の2世紀から3世紀ごろの土器に描かれていました。

【スライド6】の画面の左下は、奈良県の東殿塚古墳という3世紀後半から4世紀初頭ごろの非常に古い古墳の円筒埴輪に描かれた船の絵です。丸い土管のような円筒埴輪の横っ腹に船の絵が描かれていました。この船にも珍しく旗が立っております。真ん中に旗が立っていて、屋形が2つ付いております。舳先には、水先案内をする鳥形も描かれており、それが描かれた右側が船首、左側が船尾です。船を漕ぐ複数の櫂と、その一番後ろに大きな櫂が描いてあり、これが操舵用のいわゆる舵の役割をする櫂と思われます。これは弥生時代から50～60年後の古墳時代前期のものですが、随分立派な船の絵で、古墳時代の船絵としても大変精巧に描かれた絵です。

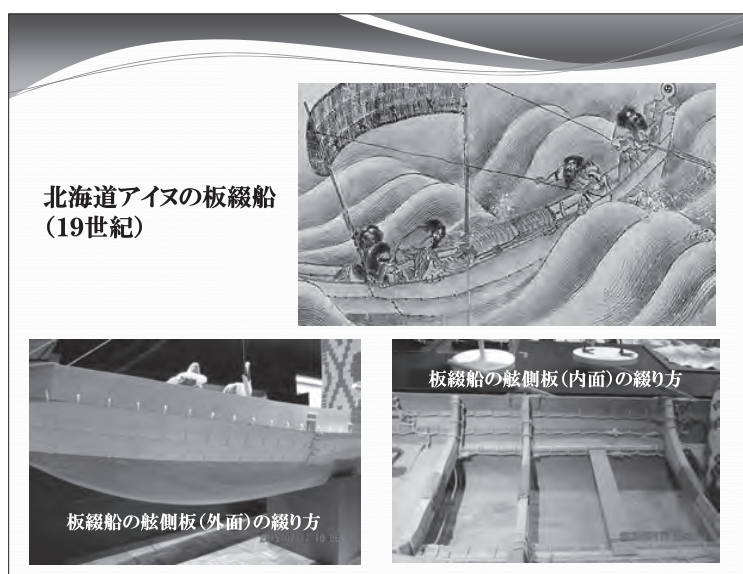
ここで、注目していただきたいのは、御領遺跡の船は、船の舳先が、皆さんから向かって左側を向いております。左側が、船の進行方向と考えていいと思います。一方、

東殿塚古墳の埴輪の船は、旗のなびき方、舳先の鳥、操舵用の櫂の位置などから考えて、船の進行方向、船首は右側です。古墳時代の九州の壁画古墳には、割とたくさん船の絵が描いてありまして、船上には棺を載せている船もあります。そのほとんどの船が東殿塚古墳の船と同じように、船首を右側にして描かれています。古墳時代の人には、右と左のどちらに天国があるかという、自分たちから見て右側に天国といいますが冥途があると考えたのではないかと推定されています。どうしてそう推定されるかという、皆さんどうでしょうか、頭の中で、さあ船を描いてくださいっていうと、どちらを船首にして描きますでしょうか。右ききの人でしたら、右から船は描かずに、大体左を船首にして船を描き、船の進行方向は左になりませんかでしょうか。普通に船の絵を描くと、大体左側が船首になると言われております。これは私が言ったんじゃないで、かつて弥生土器の神様と言われました佐原真さんが、普通に船の絵を描くとそうなるけど、古墳時代の船は、なぜかわざわざ右側を船首にして描いてある船が多いのは、右側に死後の世界・冥途があると考えていたのではないかと推定されています。なぜそう考えたかはわかりませんが、以上は神様の受け売りであります。

もう少し船の構造についてですが、弥生時代の船は、準構造船と呼ばれています。現代の船は構造船で、全て鉄板を接合して造られています。木造船の場合も江戸時代の千石船（弁財船）などは、大体平らな板を船釘で接合してあります。一方、古墳時代から平安時代ぐらいまでの古代の船は、【スライド6】の画面の右下のように、船底は剝船（丸木舟）で、その上に板を継ぎ足して、船釘ではなく桜の皮などで縫い合わせて、船を大きくしております。船底を板をつなげて水が漏れないようにつくるというのは弥生～古墳時代には非常に難しかった、というかできなかったんですね。ですから、船底は丸木舟でその上に板を継ぎ足してある。構造的に、丸木舟と構造船の中間形態ということで、構造船に準をつけて、準構造船と呼ばれています。

じゃあ具体的にどんな船かという、【スライド7】の画面の右上は、江戸時代後期の19世紀ごろの絵ですが、北海道のアイヌの人たちが乗っていた板綴船です。【ス

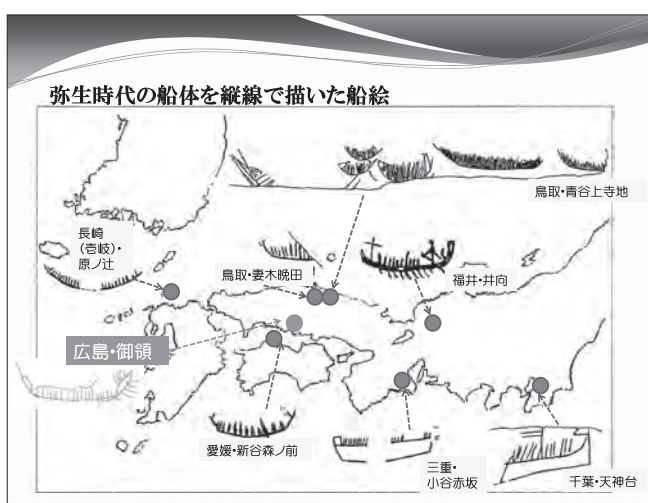
ライド7】の画面の下は、札幌の北海道博物館に復元展示してあるものですが、下は丸木舟でありまして、その上に板を紐で繋ぎ合わせて造った板綴船です。こんな船で、北海道の荒波に漁に出ているという様子がわかります。絵の船には簡単な帆がついており



【スライド7】北海道アイヌの板綴船

ますが、弥生時代の船には、今のところ帆はなかったと言われております。帆掛け船が出てくるのは古墳時代になってからであります。御領遺跡の絵の船も、大体こんな船体構造の船だったのでなかろうかと想像しております。しかし、船上に屋形（キャビン）までつけるとなると、かなり大きな船とも想像されますので、これは一体日本製やろうかどうやろうかという問題もでてきます。

御領遺跡の船の絵でもう一つの疑問点は、船体を構成する舷側版を縦方向の線で表現していることです。先ほどのアイヌの人たちの船も、横長の舟板を繋げていますし、普通の舷側版なら横長の板を使うと考えたら、横方向の線で舷側板を表現するのが普通ですが、御領遺跡の船の絵では縦線で舷側板が表現されているようです。ちょっと不思議な感じがしますが、弥生時代の船の絵を調べてみますと、【スライド8】のように壱岐の島から千葉県の出土例に、割と縦線で船体を表現したものが多くあります。こうした船の舷側の表現

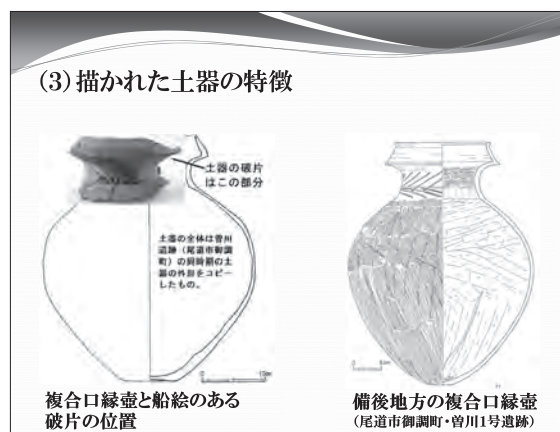


【スライド8】船体を縦線で描いた弥生時代の船絵

方法が、弥生時代に一般的で、そんなに特殊じゃないということがわかりました。ただ、本当に船の舷側が縦方向に板を張ったものだったのか、あるいは何かしら船体に波を避けるとか、しぶきを避けるとかいうような工夫の覆いが掛けられていたのかというのは、明らかではありません。とりあえず、一般的な弥生時代の船の舷側の描き方だったということはわかりました。

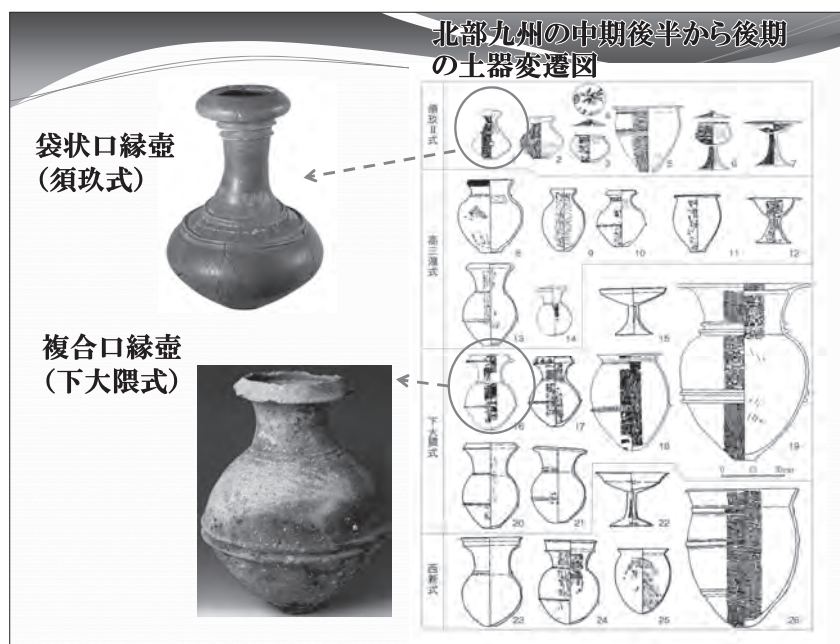
(3) 描かれた土器の特徴

さて、この船絵が描かれた御領の土器は、一体どんな形の壺だったかですが、破片から復元される全体の形は【スライド9】のような壺です。画面右側の土器は、尾道市御調町のほぼ同時代の複合口縁壺で、最大径50cm、高さ60cmぐらいの壺です。御領の土器はその頸から上の部分の破片で、頸部に粘土帯が貼り付けられているのが特徴です。備後地方の同時期の複合口縁壺には、画面右側の土器のように頸部に粘土帯の貼り付けがないのが特徴です。複合口縁壺と



【スライド9】御領遺跡の船絵壺の特徴

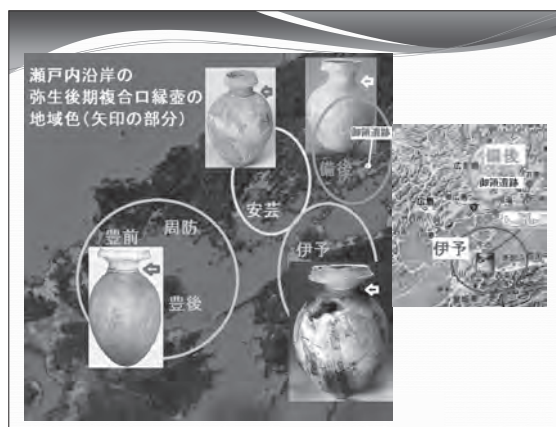
は基本的にどういう性格の壺かといいますと、【スライド10】を見ていただきますと、画面の右側は北部九州の弥生時代中期末から後期の土器の移り変わりを表にしたもの（編年表）ですが、後期前半は高三瀧式、中ごろは



【スライド10】複合口縁壺の成り立ち

下大隈式、後半は西新町式というような型式名で呼ばれています。さらにこれら後期の土器群のもう一つ前、中期の終わりごろの土器は須玖Ⅱ式という非常に美しい土器群があります。これは今の福岡市の周辺にあった奴国、みなさんご存知の中国の後漢王朝から西暦57（建武中元2）年に奴国王の金印をもらった奴国ですが、その領域でしか作られていない細長い首に、口のところが膨らんだ袋状口縁壺（【スライド10】の画面左上）と言われる独特の形の壺が特徴の土器群です。この袋状口縁壺は、中期の後半ごろに奴国の領域で突然出てきます。というのは、これより前の時期にこの壺のルーツになるような形の土器はなく、ある日突然考えついて作り出された土器とされるちょっと変わった形の壺です。しかし、その後はこの袋状口縁壺をルーツにして、だんだん口縁部が「くの字」状に折れ曲がった複合口縁壺が、北部九州で作られるようになり、そして恐らくその影響があったんだと思いますけども、西部瀬戸内地域、大分県とか山口県、愛媛県、それから広島県まで、こういう複合口縁壺が一般的になります。その一番東の端が備後地方なんですけれども、備後地方のものは北部九州に近い豊前・豊後・周防・伊予・安芸などのものと比べて少し違いがありまして、【スライド11】画面左側の各地の土器の頸の部分に矢印を付けていますが、粘土帯の貼り付けが見えますでしょうか。備後地方以外の複合口縁壺には、頸部に粘土帯の貼り付けがありますが、備後地方のものにはこの貼り付けがありません。

そうしますと、御領遺跡の船絵の壺は、形態的にどうも伊予地方の土器とよく似ている。そして素材の粘土の感じもよく似ているようでして、恐らくこの土器は伊予地方の今治のあたりで作られ、瀬戸内海を渡って御領遺跡まで運ばれたものではないかというのが、今のところの推定であります（【スライド11】画面右側）。



【スライド11】瀬戸内の複合口縁壺の地域色

2 船が描かれた土器の形から邪馬台国時代の交易の実態を推し量る

(1) 旅する土器

弥生時代後期の複合口縁壺の本家本元は福岡市周辺の北部九州ですが、この形の壺は日本海沿岸を中心に随分遠くまで行っております（【スライド12】画面左側）。複合口縁壺の口の部分がわざわざ「くの字」に曲がっているのは、【スライド12】の画面右上に変な絵を描いておりますが、壺に蓋（落とし蓋）をするための工夫としか考えられません。これは壺から物を出すときにはスムーズに出にくいのですが、何か物を入れて保管するときに蓋を当然したと考えられますので、中の物にカビや虫がついたりして傷まないようにするために蓋をする場合は、蓋がズレたり落ちたりしないように、壺の口が二重になっているのだと考えられます。

こうした壺の口の工夫は、北部九州の奴国の地域で先進的に始められたものですが、それが後期になって西部瀬戸内のあたりまで普及していくのだと思います。そしてこの壺の蓋のもう一つの役割は、遠くまで物を運ぶときに、蓋の上を布や皮などで覆ってそれを紐で縛れば、船で揺られても蓋が落ちず、中身が外へ飛び出さないような工夫として応用できたのだと思います。今日のお話しの一つの核心は、弥生時代の人たちが、具体的には例えば卑弥呼の使いが魏の国に献上品を持って行くときや日本列島内でもよその地方へ何か贈り物をする場合に、貴重な物を何に入れて持って行くかというところ、やっぱりこうした蓋ができる複合口縁壺に蓋をしてさらに布や皮などで覆って紐で縛って持って行ったと思われるので、そういう風にしますと、物理的に中身がこぼれな



【スライド12】弥生時代の交易の実例

いという実利的な効用だけでなく、中身が見た目にも非常に貴重に見えるという効果があります。【スライド12】の画面右下は、中世の茶壺ですが、蓋がしてあって、さらに錦で覆って、組紐のようなものでリボンにして縛ってあります。これは壺の中に大変貴重なお茶が入っていますよという、今でいう過剰包装に近いものですが、こうすることによって、たいしてうまいお茶でなくてもお殿様に献上したりされるんですね。そういう過剰包装の遠いルーツがこの弥生時代の終わりごろ、邪馬台国の時代に、複合口縁壺を使って始まったのではないかと推定をしております。

(2) 船絵の仕掛けを憶測する・・・と

この推定をさらに大きくしまして、【スライド13】の画面左上は、古墳時代初頭の大きな複合口縁壺ですが、口の部分にだけ文様や装飾がみられます。そして中身がたくさん入るように胴体は大きく膨らんでいます。こういう壺というのは、【スライド13】の画面中上や右上、左下のように、江戸時代のお茶壺道中の壺のように使われたものかもしれません。お茶壺道中は、江戸時代に宇治の一番茶を江戸の將軍様に献上するために、まるでお殿様か將軍様のように茶壺を駕籠に乗せて東海道を下っていきました。童謡にもあるとおり、♪♪ずいずいずっころばしごまみそずい、茶壺に追われて戸びっしょん♪♪・・・・。貴重な茶壺が通るので、沿道の人々は家の中に身を隠し、その道をしずしずと茶壺行列が通っていきました。ついでに妄想をたくましくして、【スライド13】の画面右下

は、お茶壺行列の最後は、これは福岡市の栄西禅師が最初にお茶の木を植えたといわれる博多駅前前の聖福寺というお寺で行われるお茶行列の最後の茶壺の口切りの儀式的場面です。恭しく茶壺の蓋を開けるところです。こうしたのちの時代の贈り物や献上

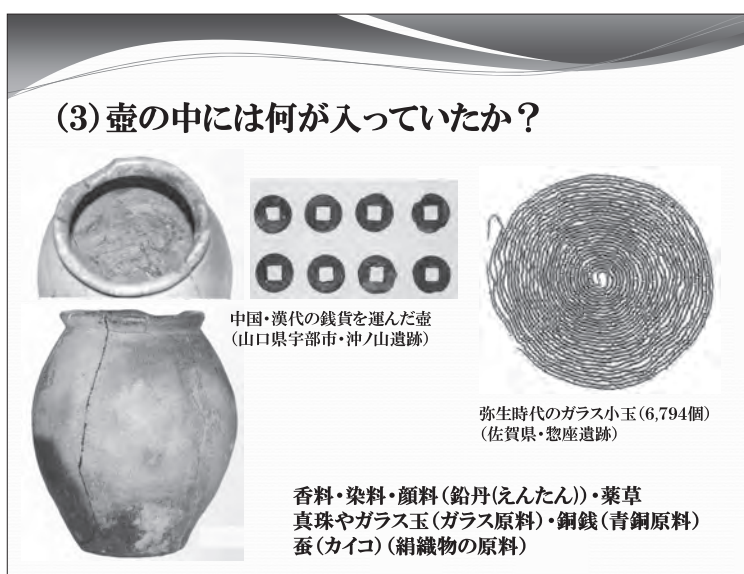


【スライド13】御領遺跡の船絵の仕掛けを憶測すると

品の儀式を見ていると、弥生時代にも献上品をどこかに持っていったときには、規模や内容は原始的でもこれに似たような行列と開封の儀式のようなことをしたのではないだろうかと思像できます。弥生時代の後期，邪馬台国時代にこうした行為に使われた容器としては，この複合口縁壺をおいてほかにはないと思われるのです。

(3) 壺の中には何が入っていたか？

さて，この推定が幾分かでもあたっているとすると，御領遺跡の船絵の壺の中には何が入られて伊予の国から海路はるばる備後の国へ，持って来られたかということが気になります。それは残念ながら，わかりません。中身が何も残っておりません。推定するとすれば，【スライド14】の画面左側は，弥生時代中期後半の例ですが，山口県の宇部市の砂浜の遺跡・沖ノ山遺跡から見つかった壺とその中身です。壺は複合口縁壺ではありませんが，日本列島の弥生土器ではなく，朝鮮半島系の無文土器の壺だと考えられるものです。この壺の中に，漢の時代の銅銭がたくさん詰まっていた。当時の日本列島では銅は精錬されていませんでしたから，銅鐸や銅矛などの原料としても大陸から銅が運ばれてきていました。その運搬の容器は，この壺のようなものだったというのが，これで推定されております。この壺の内側には，銅銭が錆びてくっついた跡も残っていました。こうした金属などの形が残るもの以外に想定されるのは，香料とか染料，顔料など日本列島ではまだ産出・生産されていなかったような列島外の産物でしょうか。『魏志倭人伝』の中には銅鏡以外にも，「鉛丹」という顔料を魏の皇帝が卑弥呼に授けたと書かれています。それから薬草や真珠のほか，ガラス玉な



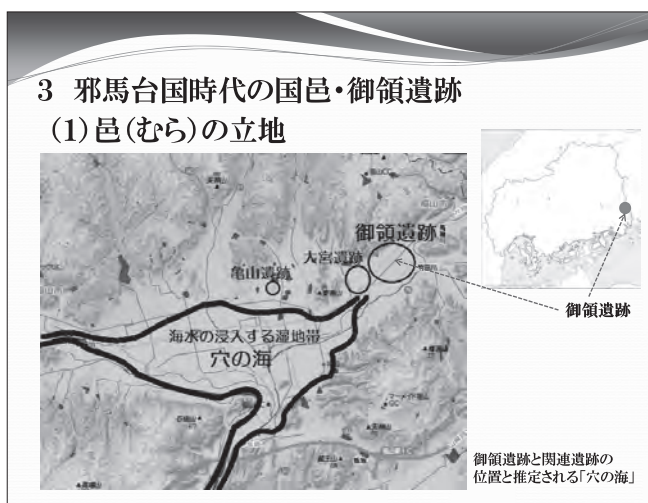
【スライド14】 弥生時代の交易の中身

どもあったでしょうか。【スライド14】の画面右側は、7,000個近いガラス小玉で、佐賀県の遺跡から見つかったものですが、ガラスも当時の日本列島では生産できなかったもので、大陸から船で日本列島に運ばれてきたものです。こうしたいわば輸入品のようなのが、壺の中身の候補になりますが、もう一つ生ものとしては、絹のもとになる蚕なども候補になると思います。たくさん芋虫が壺の中に入って、大陸から持って来られていたかもしれません。絹織物の原料を作る養蚕は、稲作と前後して大陸から伝わったと考えられていますから、その製織技術とともに当然蚕も運ばれてきたに違いありません。恐らく虫かごのようなものではなく、壺に入れられて列島内を旅したのではないかと思います。ほかにもいろいろ想像できると思いますが、いずれにしても大陸から運ばれてきたものなどを中心に、贈り物や献上品として貴重な物が日本列島を壺に入れられて、行き来したのではなかろうかと思います。こうした贈り物が盛んになるのが、複合口縁壺が普及する弥生時代後期で、これが邪馬台国時代と重なります。

3 邪馬台国時代の国邑・御領遺跡

(1) 邑（むら）の立地

こうした複合口縁壺に船の絵を描いた珍しい壺がもたらされたことが判明した御領遺跡について、少し話をいたします。【スライド15】をご覧ください。御領遺跡は広島県の一番東の端にあります。福山市街地の北部に位置し、芦田川が神辺平野のあたりで、西の方へ曲がって、府中市から世羅台地に至りますが、東の方からは高屋川が岡山の方から流れてきて芦田川に合流します。遺跡は、この高屋川の流域に位置します。かつて芦田川と高屋川が合流



【スライド15】御領遺跡の立地

する神辺平野一帯は、海水が浸入する入江状になっており穴の海と呼ばれていたという伝承があります。穴の海は、『日本書紀』の景行天皇条の中に、ヤマトタケル（日本武尊）が熊襲を撃った帰りに立ち寄った場所として登場します。神辺平野はその穴の海の伝承地の一つです。ただし、ここというわけではありません。有力候補地は、吉備の児島湾のほか、備後の松永湾など瀬戸内には湾入した入り江状の地形のところはたくさんありますので、『日本書紀』は特定の場所を指して穴の海と言ったんじゃないで、瀬戸内海沿岸の地形を漠然と言った表現だともいわれております。

御領遺跡は、海水が浸入するような湿地帯に臨むやや高台に位置しておりまして、東から御領遺跡、大宮遺跡、亀山遺跡という弥生時代の有数の遺跡が並列しています。

【スライド16】は、御領遺跡をもう少し拡大してみた地形図です。画面右上から左下へ直線的に伸びる黄緑色の線は、井原鉄道という鉄道路線です。その路線にほぼ並行して平野を貫く黒い帯は、近世以前の旧高屋川の川筋です。現在の高屋川は南の山裾

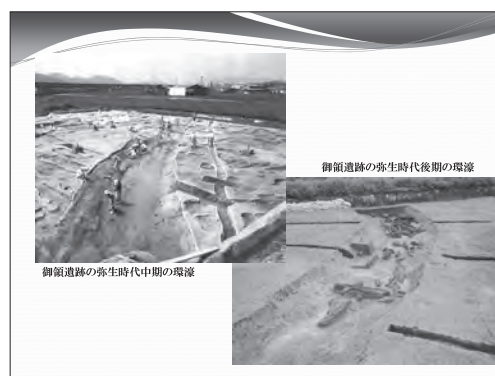


【スライド16】 御領遺跡の範囲と調査地点

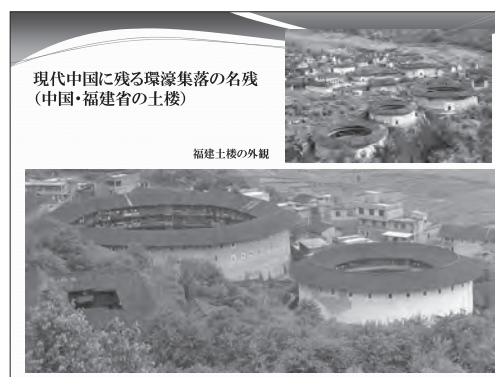
を流れておりますが、近世以前は平野の中央付近をほぼ直線的に流れていたようです。これは現在の水田の標高や区画の乱れなどからみて推定されております。現在の高屋川が、いつごろからそうなったかは記録に残っていないので、明確ではありませんが、関ヶ原の戦いの後、水野勝成が備後の領主として神辺城へ入りますけども、最初に河川改修をして現在の河道にしたのは、水野氏ではないかといわれております。これは全国的にこの時期の新領主が競って領内の石高を上げるために新田開発や河川改修に取り組んでおりますので、福山藩でも同様なことが行われたのではないかといわれ

ております。それで中世以前は、平野の真ん中を川が流れておりまして、御領遺跡はこの川の両側に分布しております。御領遺跡の出土品のなかで注目される後漢鏡の破片が出土したのは、地図の左端に近いところで、船絵の壺が出た場所が地図の右端に近いあたりです。それから地図に小さな赤い点々がたくさんありますが、これは調査地点を示しています。御領遺跡の発掘調査は、神辺町時代から現在の福山市教育委員会や広島県教育委員会、県教育事業団などが30年以上何度も色々な経緯で調査を重ねてきております。その中で環濠集落の可能性が考えられる大きな溝が二か所で明らかになっております【スライド17】。一つは旧河道の北側で弥生時代中期のものが、南側で弥生時代後期の環濠集落らしき遺構が明らかになっています。

『魏志倭人伝』を資料集の巻末につけておりますが、その中には、「倭人は帯方東南の大海の中にあり、山島に依りて国邑をなす」と『国邑』という言葉が出てきます。これは中国でいう城壁で囲まれた集落でありまして、中国には今でも福建省に残っている土楼が環濠集落の名残じゃないかともいわれています【スライド18】。土楼は円形の土壁で囲まれた集合住宅です。壁が円形ですから、周りがよく見えて、死



【スライド17】 御領遺跡の環濠



【スライド18】 中国・福建土楼



【スライド19】 中国・福建土楼の内部



【スライド20】 中国・福建土楼の内部

角がありません。土楼の内部は【スライド19】のような集合住宅になっておりまして、真ん中に先祖を祭るお堂があり、お堂がないところは【スライド20】のように広場になっています。環濠集落も恐らくこんなイメージの集落ではなかろうかと想像されます。中国でも土楼は福建省に残る非常に珍しい住居形態です。

(2) 穴(あな)の海

次に、穴の海といいますか、船絵壺が出た御領遺跡周辺の地形について少し触れておきます。【スライド21】は、第7次調査地点の上空から南西方向の神辺平野を俯瞰

した写真ですが、画面の右上のあたりが「穴の海」と言われていたところであります。

写真を見ていただいても、ずっと向こう側が下がっているなというのがわかると思いますけども、【スライド22】

の衛星写真で見ますと、深く湾入した福山湾から狭い水道

を通過して「穴の海」があるのがわかります。満潮のときには潮が入ってくるような海

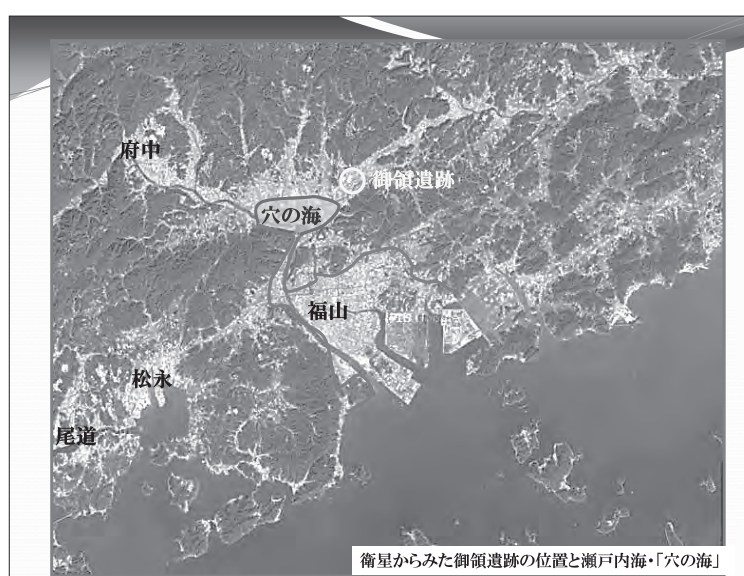
だったのでしょうか。そのやや北東の奥に御領遺跡があります。さらに東に行くと吉備

の中心部へ抜けていく。「穴の海」ならもう一つ、現在でも穴状になったところが写っ

ています。



【スライド21】御領遺跡と「穴の海」



【スライド22】御領遺跡の位置

ていますが、おわかりになるでしょうか。福山の西の松永湾は現在でも穴のような海になっていますね。この松永湾も古代穴の海の候補地でもあります。こういう地形のところは瀬戸内沿岸にはたくさんありまして、先ほど申しましたように、ヤマトタケル伝説の穴の海というのは、特定の場所ではなく、瀬戸内の地形を一般化して表現したのではないかとも言われております。

(3) 交流の証拠

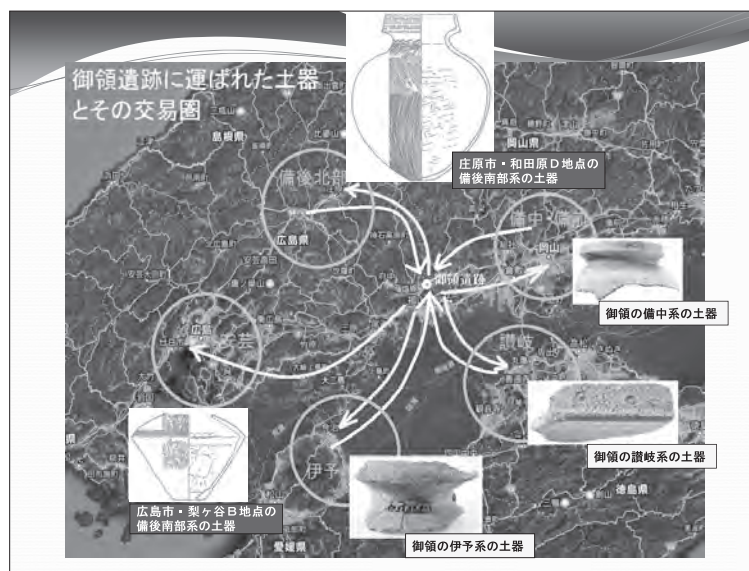
では、こうした海辺に近い遺跡にどんなものが交流の証拠として残っているかを御領遺跡の出土品で見えますと、【スライド23】は、後漢鏡の破片であります。中国の後漢時代の鏡の一部を割り取って、磨いて穴をあけペンダントにしたものが見つかっています。恐らく日本列島内を回り

回って中国産の鏡の破片が御領遺跡にもたらされたものと考えられます。こうした貴重品はなかなか遺跡に残っておりませんが、たくさん出てくる土器の破片を調べてみますと、【スライド24】のように船絵壺は伊予から持ち込まれていますが、ほかに文様



【スライド23】 御領遺跡の交流の証拠

の特徴から讃岐（香川県）の土器や隣接する備中の土器、それと画面には白地の図面で示していますが、御領遺跡とは限りませんが備後地方でつくられた壺が庄原市の遺跡から見つかっています。これは備後南部に特徴的な複合口縁壺です。それから、先ほど報



【スライド24】 御領遺跡に運ばれた土器とその交易圏

告のありました広島市の梨ヶ谷遺跡にも備後地方でつくられた胴部が角張る特徴的な土器が出土しております。恐らく備後地方の人が梨ヶ谷遺跡へ何か持って行ったんだと思います。出土した土器は、いわばその贈り物の空箱であります。

おわりに

もう時間がなくなりましたが、最後にまとめますと【スライド25】のようになります。見つかった船の絵から考えて、①外洋に漕ぎ出せる大型船の出現、複合口縁壺の普及から、②貢物の土器が仕立てられている、ということがわかりました。そしてあの壺のなかに何が入っていたかわかりませんが、当時の社会では、何かしら貢物を持っていくと、それに答えてお返しがもらえる、どのような儀礼が普及しつつあったのではないか。これは『魏志倭人伝』の中にも書かれていますが、卑弥呼は大した物は持って行ってないんですけれども、随分立派な銅鏡百枚とか、金や鉛丹など様々なものをもらっています。魏の皇帝は大盤振る舞いをしてくれました。この経験などから、倭人は何か貢物を持っていくと、すごくたくさんいいものがもらえるんだということを経馬台国の時代前後に、中国とのやりとりの中で学んだのではないかと思います。こうしたやり方を倭国内でもやり出したのが経馬台国の時代ではなかったらうかと思えます。つまり、③貢物と答礼品が社会形成の要因ではないか、と考えられるのです。

貢物を持っていくといろんなお返しがもらえて、そして仲間になっていく、あるいは上下関係を築くというような形の社会が経馬台国の時代に本格的に始まったのではないかと考えられるのです。結論としては、貢ぎ物と賜り物の社会、貢賜社会というのは変な言い

御領遺跡から考えた経馬台国の時代

- ①外洋に漕ぎ出せる大型船の出現
- ②貢物用の土器が仕立てられている
- ③貢物と答礼品が社会形成の要因か
- ④経馬台国の時代＝貢賜社会

おしまい m(_|_)m

【スライド25】御領遺跡から考えた経馬台国の時代

方ではありますが、そんな社会じゃなかったかと考えています。物のやりとりをするのに、自然発生的で即物的な物々交換で社会が成り立っていた縄文時代以来のお互いに欲しいものを交換しましょうみたいな単純な社会じゃなくて、大した貢ぎ物じゃなくても、随分立派なお返しがもらえる。それによって上下関係が決まってくる、そして国邑が上下関係をもって連合していくって言いますかね、そういうような時代じゃなかったかと思っています。変な社会名称を勝手に作りましたが、④邪馬台国時代は貢賜社会ではなかったか、と考えてみました。以上で、報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

《参考文献》

- (財)アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ生活文化再現マニュアル 綴る』2002年
石井兼治『復元するシリーズ④日本の船を復元するー古代から近世までー』学習研究社2002年
愛媛新聞社『よみがえる伊予の古代』1985年
大阪府立弥生文化博物館・九州国立博物館『邪馬台国ー九州と近畿ー』2010年
岡村秀典『鏡が語る古代史』(岩波新書)岩波書店2017年
柏原精一『図説・邪馬台国物産帳』河出書房新社1993年
工楽善通『日本の原始美術8 弥生土器』講談社1979年
孔祥星『図説中国古代銅鏡史』中国書店1991年
武光誠・読売新聞調査研究本部『読売ぶっくれっとNo.10魏志倭人伝と邪馬台国』読売新聞社1998年
常松幹雄「九州地方の土器」『考古資料大観第2巻 弥生古墳時代土器Ⅱ』小学館2002年
天理市教育委員会『西殿塚古墳・東殿塚古墳』(天理市埋蔵文化財調査報告書第7集)2000年
西嶋定生『邪馬台国と倭国ー古代日本と東アジアー』吉川弘文館1994年
平林工「神辺平野の環濠集落」『考古学から見た地域文化』溪水社1999年
広島県教委・(財)広島県埋文センター『神辺御領遺跡ー国鉄井原線建設に係る発掘報告ー』1981年
広島県立歴史民俗資料館『ひろしまの青銅器』1993年
広島県立歴史博物館『商人たちの瀬戸内』1996年
(財)広島県教育事業団『中国横断尾道松江線に伴う埋文報告(2) 曾川1号(A~D地区)』2006年
(公財)広島県教育事業団『弥生時代の船(記録集)』2016年
(公財)広島県教育事業団『国道313号事業に伴う埋文報告(5) 御領遺跡(第7次調査2013)』2017年
深澤芳樹「港の出現と弥生船団」『月間考古学ジャーナルNo.536』考古学ジャーナル社2005年
福山市教育委員会『福山市内遺跡発掘調査概要Ⅷー2012年度(平成24年度)ー』2014年
福山市『福山市史 原始から現代まで』2017年
立命館大学考古学論集刊行会『立命館大学考古学資料集第5冊 原始・古代の船1』2012年

《図【スライド】等の出典》

- 【スライド1～5】 広島県教育事業団2017年
- 【スライド6】 広島県教育事業団2017年，天理市教育委員会2000年，石井謙治2002年
- 【スライド7】 アイス文化振興・研究推進機構2002年及び北海道博物館展示資料
- 【スライド8】 深澤芳樹2005年
- 【スライド9】 広島県教育事業団2006年
- 【スライド10】 常松幹雄2002年
- 【スライド11】 伊藤作成（土器は各報告書から）
- 【スライド12】 常松幹雄2002年，広島県立歴史博物館1996年
- 【スライド13】 工業善通1979年，博多お茶壺道中H.P.
- 【スライド14】 柏原精一1993年
- 【スライド15】 伊藤作成
- 【スライド16】 福山市教育委員会2014年から伊藤作成
- 【スライド17】 福山市2017年
- 【スライド18～20】 福建土楼H.P.
- 【スライド21】 広島県教育事業団2017年
- 【スライド22】 伊藤作成
- 【スライド23】 広島県教委・広島県埋蔵文化財調査センター1981年，孔祥星1991年
- 【スライド24】 伊藤作成
- 【スライド25】 伊藤作成

【報告Ⅲ】ひろしまで発見された邪馬台国時代の遺跡（墓と後漢鏡）

壬生西谷遺跡（北広島町）

廿日市市教育委員会 生涯学習課

藤田 広幸

おはようございます。廿日市市教育委員会の藤田と申します。今日はお寒い中たくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

私は今、廿日市市教育委員会に勤務しているのですが、今から30年前ですけど、この遺跡を掘る当時は、広島県埋蔵文化財調査センターと呼ばれていましたが、そちらにいました。今の廿日市市教育委員会に勤務しまして、廿日市市も合併後、宮島の文化財調査が多いものですから、発掘調査も古くても中世のものが見つかればいいなという感じです。宮島では、もうほとんど近世・江戸時代以降が中心なので、ほとんど茶椀ばかり見ていまして、弥生土器って、もう30年ぐらい見てないなとあらためて感じたところです。



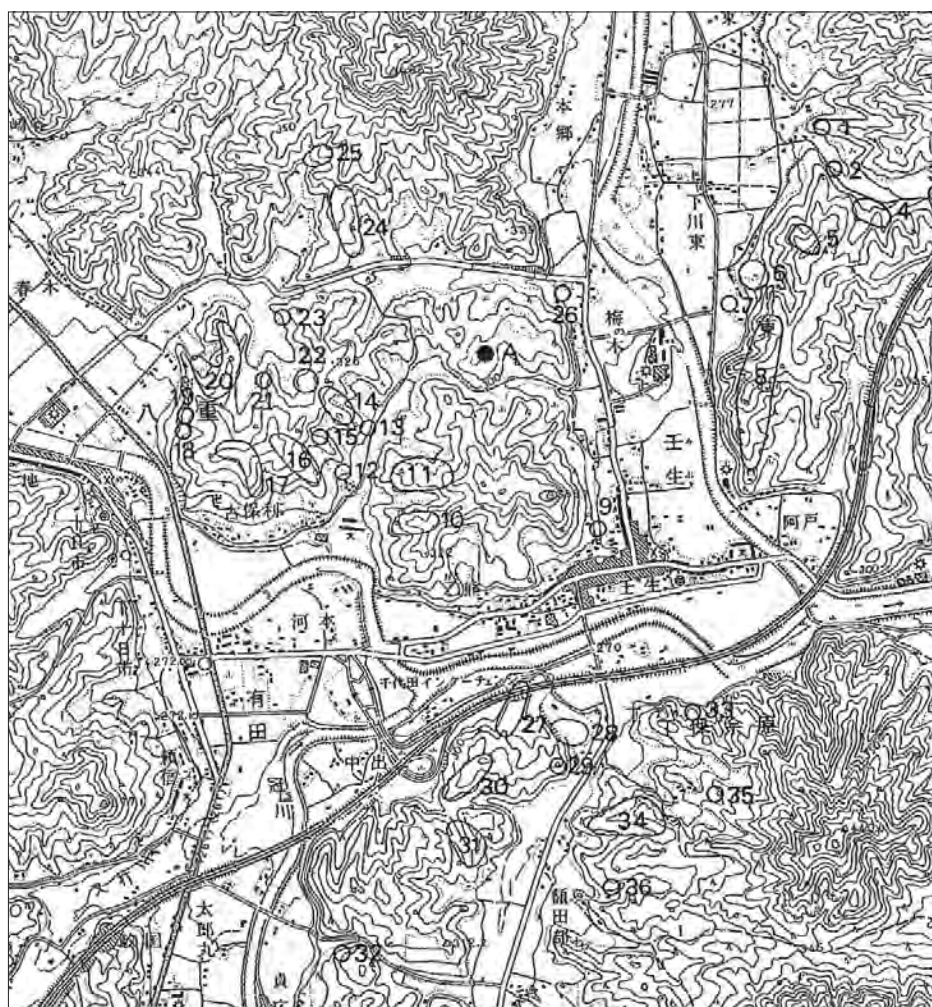
今日はロビーに展示してありましたけど、私も土器を見るのは、本当に30年ぶりぐらいかな。鏡は三次の県立歴史民俗資料館にずっと展示してありますので、時々見には行ってたんですけど、ガラス越しですから、今日のように直で見られることは、ないと思いますので、しっかり見ていただければと思います。

それでは、壬生西谷遺跡について、全国的に類例がないもんなんで、細かくここがこうだ、ああだという話はできないんですが、遺跡の概要と言いますか。そういうようなものをお話をさせていただければというふうに思っております。

（1）遺跡の位置

壬生西谷遺跡は、山県郡北広島町の壬生というところにあります。調査は総合運動公園ができるということで、それに伴って昭和63年、本当に30年ぐらい前に調査しま

した。この北広島町も平成17年に芸北，豊平，大朝，千代田の4町が合併しておりまして，遺跡は旧千代田町にありました。合併後の北広島町には，約1,000カ所の遺跡が確認されています。その中でも旧千代田町に限りますと，392カ所，約400カ所とされていまして，遺跡の本当に多いところですね。丘陵地帯はほとんど遺跡じゃないんかというぐらいで，そういったようなところになってます。



資料集第1図 周辺遺跡分布図

- A 壬生西谷遺跡 1 中嶺山古墳群 2 下日神谷古墳 3 上日神谷遺跡 4 日神谷西古墳 5 下川東古墳群 6 川東箱式石棺群 7 山根遺跡 8 山根古墳群 9 壬生神社遺跡 10 飛石古墳群 11 背子山古墳群 12 刈又2号遺跡 13 刈又1号遺跡 14 古保利古墳群檜木支群 15 古保利古墳群鍛冶ヶ市支群 16 古保利古墳群岡田支群 17 古保利古墳群薬師堂裏支群 18 古保利野師西古墳 19 野師遺跡 20 古保利古墳群野師支群 21 堂の後2号遺跡 22 古保利古墳群堂の後支群 23 堂の後1号遺跡 24 すくもや古墳群 25 恩ヶ迫古墳群 26 梅木遺跡 27 塚迫遺跡群 28 金子古墳群 29 大岡古墳 30 中出勝負峠墳墓群 31 歳ノ神遺跡群 32 青木原遺跡 33 古土井古墳 34 国藤古墳群 35 養老温泉裏遺跡 36 天津古墳

千代田町については、山陽と山陰を結ぶ石州街道があったのはご存知だと思います。現在では、東西に中国縦貫自動車道ができて、また南北には中国横断道（浜田道）が通っているということで、内陸交通の要所となっています。それは皆さんご存知だと思います。

遺跡の位置は、資料集の第1図の中央付近にAというのがありますが、これが壬生西谷遺跡です。周辺には、中国縦貫自動車道を挟んで真南に歳ノ神遺跡群とか中出勝負峠墳墓群といったものがあります。これらは壬生西谷遺跡と同じような時期の墳墓遺跡なんですけど、そういったものが見つかっております。その他、第1図を見ただけであれば、周辺は遺跡が多いところだということがお分かりいただけると思います。

古代には、このあたりは『倭名類聚抄』によると、安芸国山県郡五郷の一つの壬生郷というところにあたります。山県郡衙の所在地については明確ではないんですが、壬生に古保利（こぼり）の薬師堂というのがありまして、その古保利という地名は「郡（こぼり）」ですね、郡という字に由来するということで、郡衙はこのあたりにあったんじゃないかと推定されています。こういったことから、壬生西谷遺跡の周辺が古くから山県郡の政治的な中心地と考えられています。

（2）調査の概要

それでは、調査の概要についてお話ししたいと思います。

遺跡は、現在の壬生の集落から1 kmほど北に位置する江の川が形成した沖積地を望む丘陵上に位置しています。丘陵の西・南側には小さな谷が入り組んでおりまして、



【スライド1】調査前の遺跡



【スライド2】調査後の空中写真

調査は、北東方向に延びる丘陵の標高約315～320mの尾根上を中心に行いました。遺跡と近くの耕作地との比高は約20mです。【スライド1】は、もうかなり周りを造成しているところなんですけど、これが先ほど言いましたように運動公園の造成に伴っての調査なんで、その状況も写っているというところなんです。

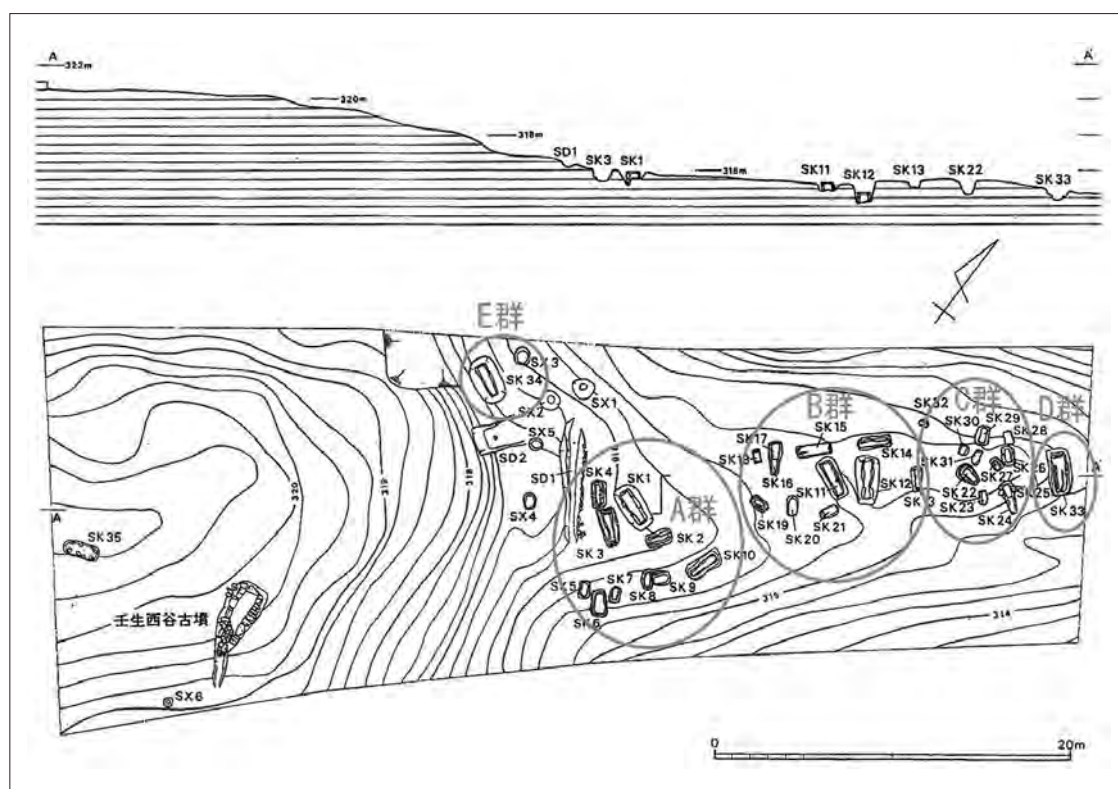
【スライド2】は、調査後の空中写真です。画面の右側が高く、左側に向かってだんだん低くなっています。

【スライド3】は、調査後の全景で、標高の低い北東側から撮ったものです。確認した主な遺構は、弥生時代後期の墳墓群です。弥生時代のお墓が34基、ほかに古墳時代後期の古墳が1基と中世墳墓が1基見つかりました。



【スライド3】調査後の全景

弥生時代の墳墓は、A～E群の5群に区分しています。画面の上方に、尾根を横切るよ



資料集第2図 遺構配置図

うな溝があります。多分お墓を区切るための溝が1本ありまして、この溝に近いあたりのお墓の塊をA群というふうに呼んでおります。その手前側、画面の中央付近に石棺等を中心としましてB群、そのさらに手前の子供用だと思われる小さな埋葬施設が集まっているC群、その手前の画面の一番手前に写っているのが鏡が出ました土坑で、これをD群としています。E群は1基しか見つかっていないんですが、画面上方の溝より外側になります。

【スライド4】は、標高の高い南西側から撮ったものです。画面の手前に先ほど申しました溝があります。溝の肩に石を貼り付けて区画する溝が1本ありまして、そのあたりにA群、さらに向こうがB群、小型の墓坑C群、さらにD群と並んでいます。

最初に、調査の苦労話をちょっとさせていただくと、スライドの画面を見ていただいてもちょっとわかりますように、墓坑が掘り込まれている地面の色を見ていただくと、画面上方のB群のあたりより向こうは少し白っぽい花崗岩のバイラン土なんですけど、手前のA地点のあたりは赤っぽくなっていると思いますが、このあたりはすごく粘土質の土壌で墓坑の土と地山の土の見分けが非常に難しいところでした。普通住居跡などでしたら、住居が壊れた後にだんだん土が積もって行って埋まっていくという状況の中で、黒っぽい汚れた土が入りますから、土層の見分けはつくのですが、墓坑は墓穴ですからなかなかわかりにくいといえますか。お墓の場合は、墓穴掘るとそのままずっと置いておくことはないので、すぐ埋めてしまいます。そうすると、墓穴の地山も墓穴を埋めた土もよく似た土壌になってしまって、すごくわかりにくいんですね。そうした土壌の違いがあ



【スライド4】調査後全景（南西側から）



【スライド5】A群全景

りまして、特にA群のあたりは、何かありそうだけど、よくわからんということで、かなり苦労して掘った部分です。そのA群とって呼んでいる部分には、溝があって、箱式石棺や石蓋土坑、それに土坑墓などがあり、これらが一群を形成しているというのがわかっていただけるんじゃないかと思います（【スライド5】）。

続きまして【スライド6】は、B群です。B群は2基の箱式石棺を中心にして、その周りに木棺墓や土坑墓がつくられています。画面の一番手前の右は墓坑が2段になっているのがおわかりになるかと思うんですが、墓坑を2段に掘りくぼめて木を渡して、木蓋をしたものと考えられます。画面上方の箱式石棺の左側の墓坑も2段土坑になっています。その手前の墓坑には、小口の部分に側板をはめ込む突起がありますから多分これは組合式木棺だったんだというのわかります。



【スライド6】B群全景

【スライド7】は、C群です。これらは全て小型の埋葬施設なので、子供用の墓坑群だろうと考えています。この時期、こういった形で子供の埋葬が集中するものは少なく、だいたいぽつんと離れたり、集落の近くに単独で埋葬されていたりとか、そういう形の小児墓が多いのが普通です。今のところ、県内でもここぐらいしかないんじゃないかと思います。【スライド8】は、そのC群のなかにあったSK27という土器を用いた土坑墓です。土器は棺に用いたのではなく、こういった形で甕形土器を割って土坑墓の蓋にしていたよ



【スライド7】C群全景



【スライド8】C群SK27

うです。土器は2個体分ありました。こうした墓を、土器蓋土坑墓といっています。

【スライド9】は、SK34という、丘陵のかなり上のほうから出てきた石棺です。石棺内から人骨の頭部が出ております。



【スライド9】C群SK34

【スライド10】は、ちょっと時代は外れるんですけど、横穴式石室の壬生西谷古墳です。石室の床面は礫敷きでして、備後南部の福山市などに数例ありますが、安芸北部では例がないものです。



【スライド10】壬生西谷古墳

【スライド11】は、中世墳墓です。丘陵の一番上にあって、この遺跡を象徴するような感じの墳墓です。時期は、鎌倉時代以降だろうと考えているんですが、墓坑の西端付近の中央にあるのが、和鏡と言いまして、中世の銅鏡なんですね。明確ではありませんが、流水文鏡の流れをくんだような和鏡だろうと考えられます。この鏡と一緒に横から短刀が副葬されていまして、ほかには、棺に使われた鉄釘も見つかりました。調査の最後にこれは見つかったのですが、こうしてみると、この遺跡は、鏡に始まって鏡に終わったような遺跡だったんだなあとつくづく思いました。



【スライド11】中世墳墓

（3）後漢鏡が見つかった木棺墓SK33

さて【スライド12】は、こちらが今日の本題の後漢鏡が出てきましたSK33です。丘陵の一番下手の調査区の端にある遺構です。これは私らが当初、調査区を設定したときは、ここは入っていなかったのですが、調査を進める中で調査区の端から、土層

がちょっと違うところが見つかりまして、何かやっぱりここにもありそうだということで、拡張した部分で見つかりました。当初はこんな大きなものとは思いませんでした。長さが2.20m、幅が1.20mぐらいありまして、深さは1mぐらいあって、削っても削っても形が



【スライド12】SK33

わからないくらいでした。これは一体何なんだろうとか思いながら、掘ってみると、このような形の木棺墓でした。木棺墓と何でわかったかといいますと、ちょっとわかりにくいかもしれませんが、墓坑の底の左側の部分が段があって少し深くなっています。これが墓坑に木棺を置いた痕跡と考えられまして、木棺に埋葬されていたんだろうということがわかりました。

【スライド13】は、後漢鏡が出土した状況です。鏡が見つかった側が木棺の痕跡もやや幅広になっていますので、こちら側が頭位だったと推定しています。としますと被葬者の頭部の周辺に鏡が副葬されていたものと思われる。鏡は、鏡面を上にして、やや斜めになって出土しました。



【スライド13】SK33鏡出土状況

【スライド14】は、鏡面の出土状況をアップしたところなんですが、これも裏話みたいになるんですが、鏡の出土状態を写真にしようと近づいて接写しますと、何か写るんですね。何か写っている。何か写り込んでいるなと思ったら、カメラを構えた自分が写っているというぐらい、鏡面はきれいな状況というか、いい形というか、それほど保存状態がすごくよかったです。



【スライド14】SK33鏡出土状況（拡大）

【スライド15】は，【スライド12】を横から見た写真です。先ほど言いましたように，木棺の痕跡の段がよくわかります。

(4) 後漢鏡

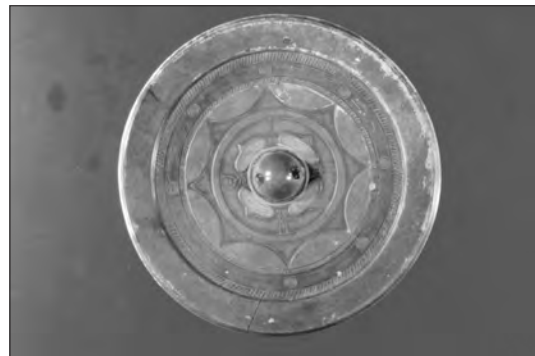
【スライド16】は，出てきた後漢鏡です。連弧文鏡，あるいは内行花文鏡と呼ばれる中国製の銅鏡です。鏡背面の文様に円弧が連なっているような文様があるということで，連弧文鏡と呼ばれています。鏡面径16.25cm，鏡背径15.6cm，中央の鈕の径が2.4cm，鈕孔径0.7cm，重さ438gの完形品です。

【スライド17】は，鏡背面の中心部分を拡大した写真ですが，鈕の周囲の四葉座の間に「長宜子孫」（長く子孫に宜し）という文字が鋳出されています。中国の鏡にはよく用いられる吉祥句とされる四文字熟語で，「（この鏡を持っていると）長く子や孫にいいことがありますよ」といった意味の言葉です。それから連弧文の外側に斜角雷文帯と呼ばれる渦巻文を要所に配置した直線的な文様が巡らされていますが，その渦巻状の文様は年代が新しくなると，渦巻文ではなく同心円文になったりするんですが，この鏡ではちゃんとぐるぐるっと渦巻きになっております。またこの渦巻文の間の直線的な斜角文は，直線がぐるぐるただ回っているんじゃなくて，途中で松葉状にひっついているんですが，それもちゃんと残っているということで，後漢鏡の中でも古く位置づけられ，後漢前半ごろのものと考えられます。

この鏡の位置づけについて少し触れますと，弥生時代の終わりごろで同じような後



【スライド15】 SK33



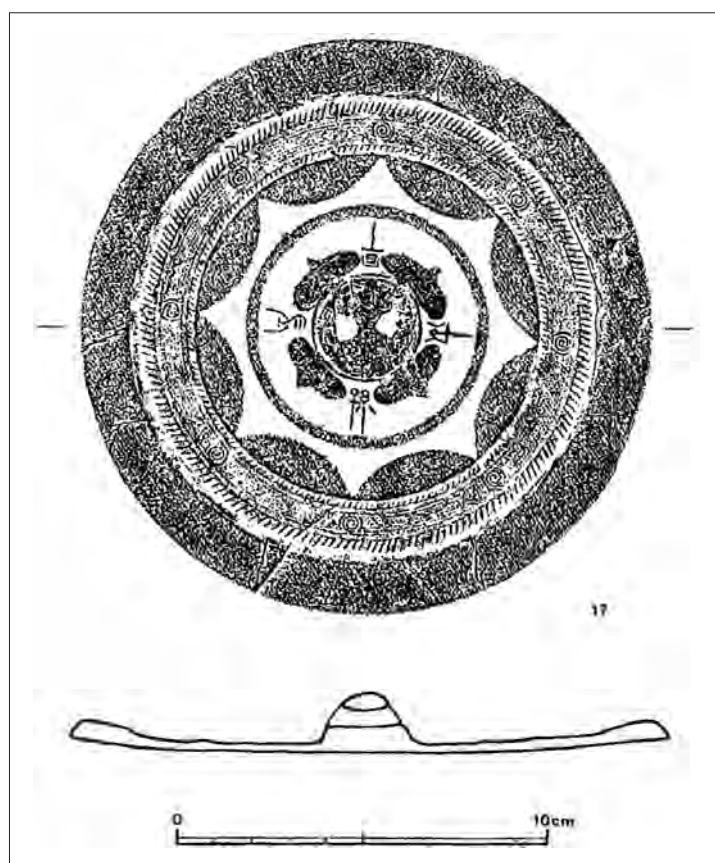
【スライド16】 SK33の後漢鏡



【スライド17】 SK33の後漢鏡（拡大）

漢の連弧文鏡が出ている遺跡というのは、北部九州を除くと30年前とほとんど変わってないんですね。30年前に調べたときに、兵庫県の西条52号墓、これは昭和38年に調査されています。僕らも学生のころ、これが一番古い古墳だとか、これが前方後円墳の起源になるんじゃないかとか、いろいろ議論された有名な墳墓です。ほかに岐阜県の瑞竜寺山の山頂遺跡からも出土しています。こちらのほうが昭和33年に出たもので、私が壬生西谷遺跡を調査したころには詳細は不明だったのですが、結局割れて出てきたらしいというのがわかりました。しかし、それが割れたのか、割られたのか、というところが問題です。最近調べたところでは、割られたものが入れられていたというようなことになっているようです。

確かに、弥生時代後期になっても北部九州では完形の鏡を墓に副葬する習慣が残るようですが、後期も終末に近くなると、中国からの輸入が少なくなったからとか、いろんな言われ方はしているんですけど、破鏡と呼ばれる、御領遺跡で見つかったような後漢鏡の破片を磨いたものなどがよく出てくるようになります。壬生西谷遺跡の後漢鏡のように、弥生時代後期の墳墓のなかに完形品を副葬した例は極めて少なくなります。特に北部九州以外では、先ほど言いました西条52号墓とか、瑞竜寺山山頂遺跡では故意に壊した鏡が副葬されているようですから、そういう点から考えて、北部九州以外では、今のところ壬生西谷遺跡以外では、完形品の後漢鏡を



資料集第4図 壬生西谷遺跡の後漢鏡（拓影）

副葬した墳墓はないというふうに言えるんじゃないかと思います。そうした意味では大変重要な遺跡であるといえます。それから壬生西谷遺跡と同じ町内の中出勝負峠墳墓群では、少し新しい時期のものなのですが、後漢鏡の破鏡も出土しています。これから考えると、そういった破鏡を副葬する風習が入る前は、完形品を副葬するような風習が確かに入ってきていたといえると思います。と言いますか、ほかに類例がないもんですから、なかなか明確な話ができないんですけども、とにかく今のところ北部九州以外の本州側で弥生時代の完形鏡の副葬の稀有な例と考えていただいてもいいと思います。

最後に、こういったちょっと話題性のあった遺跡なんで、【スライド18】【スライド19】は、現地説明会の様子なんですが、この日だけで700名ぐらいでしたかね、なかなか現地説明会でこれだけ人が集まるということはないんですが、多くの方に集まっていただきました。



【スライド18】説明会風景

白い帽子が、30年前の若き日の私です。

以上、述べてきましたように、全国でも類例のない完形の鏡が見つかった遺跡ということで、開発事業の運動公園造成事業も設計変更して遺跡を残すということになり、この丘陵に今残されております。昨年冬に行った



【スライド19】説明会風景

ときには、北広島町でカラーの説明板が公園の入り口に建てられておりました。みなさんもぜひご覧いただければと思います。

簡単ではありますが、壬生西谷遺跡について、概要をお話しさせていただきました。

どうもありがとうございました。

《引用・参考文献》

(財)広島県埋蔵文化財調査センター1986年『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』第49集

広島県教育委員会1979年「白鳥遺跡」『中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(2)』

京都国立博物館1971年『守谷孝蔵蒐集 漢鏡と隋唐鏡圖録』

明治大学考古学博物館1899年『明治大学考古学博物館蔵品目録1鏡』

西条古墳群発掘調査団1964年『西条古墳群発掘調査略報』

榑崎彰一ほか1967年「岐阜県瑞竜寺山山頂遺跡出土の古鏡について」『考古学雑誌』第53巻第1号

《図【スライド】等の出典》

【スライド1～19】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(財)広島県埋蔵文化財調査センター1986年